芦刈町文化財発掘調査報告書

小　路　遺　跡

—小城郡芦刈町所在—

1980. 3

芦刈町教育委員会

3420

芦刈町文化財発掘調査報告書

小　路　遺　跡

—小城郡芦刈町所在—

1980. 3

芦刈町教育委員会

はじめに

圃場整備事業が全国的に強力に推進されていますが、芦刈町においては面積的にも大規模なものになっています。

従来「珍ノ山」と呼ばれ、戦国時代の武将徳島氏の館跡と考えられていた畑地が、圃場整備の設計上、削平を余儀なくされました。そこで芦刈町教育委員会では国庫補助を受けて芦刈小路遺跡の発掘調査を実施しました。大規模な建物群や出土した輸入陶磁器を主体とする貴重な遺物などから、戦国時代の武将の館跡であることは確かになりました。

ここに発掘調査報告書を刊行し、学術資料として、また郷土の埋蔵文化財の認識と理解の資料として役立てていただければ幸いです。

最後にこの発掘調査に終始尽力くださった県教育委員会文化課ならびに地元の方々に感謝の意を表します。

昭和55年 3 月 31 日

芦刈町教育委員会
教育長　岡　　善　八

例　　言

1．本書は国庫補助事業として昭和54年度に発掘調査を実施した芦刈小路遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は芦刈町教育委員会が主体となり、調査の実際は佐賀県教育委員会がこれにあたった。

3．本書の執筆者はつぎのとおりである。

Ⅰ	岩松要輔	Ⅳ1.2.4.6.7.8	七田忠昭
Ⅱ	七田忠昭	3.5	川崎吉剛
Ⅲ1.	川崎吉剛	Ⅴ	七田忠昭
2.3.	七田忠昭		
(付編)	木下之治		

4．遺構の実測は調査員がこれにあたり、遺物の接合、復元には広滝敏子、宮崎礼子、古川万鶴代、高畠澄子、荒井久美、山崎美紀子、平野澄子、緒方泰子、中村八千代、樋口菅子、梅野澄子、永池早苗、三好文子、古賀安子があたり、実測には大島もと子、西村信子、古賀啓子、中村真由美、島孝子、七田忠昭があたった。整図は東中川新子、山本タカ子、馬場悦子、藤原倫子があたった。写真には川崎吉剛、西田和己、原口定、七田忠昭があたった。

5．編集は七田忠昭が担当した。

凡　　例

1．遺構番号は調査区別、遺構別に付した。Ⅰ区上層には1.Ⅱ区には2.Ⅰ区下層には3を番号の3ケタ目につけ、その前に下記の遺構の分類番号を標記する。

ＳＡ；柵　ＳＢ；建物　ＳＤ；溝　ＳＥ；井戸　ＳＫ；土壙

2．遺物実測図の番号の下には出土遺構番号を記したが、1ケタ目に×がつくものは明確な遺構に伴わないものである。

3．挿図、本文中に用いた方位はすべて磁北である。

本　文　目　次

Ⅰ．小路遺跡の歴史的周辺……1
　1．芦刈の由来……1
　2．小路、中溝部落の成立……1
　3．鴨打・徳島・神代氏の遺跡…3
　4．『北肥戦誌』（九州治乱記）に
　　あらわれた
　　鴨打・徳島氏の活動……5
Ⅱ．調査の経過……9
　1．調査に至る経過……9
　2．調査組織……9
　3．調査の概要……9
Ⅲ．遺構……12
　1．Ⅰ区の遺構……12
　(1)　土壙……12
　(2)　溝状遺構……12
　2．II区の遺構……12
　(1)　掘立柱建物跡……12
　(2)　井戸跡……16
　(3)　土壙……16
　(4)　溝跡……17
　(5)　柵跡……18
　3．Ⅰ区下層の遺構……19
　(1)　掘立柱建物跡……19
　(2)　溝跡……21
Ⅳ．遺物……24
　1．土師器……24
　2．瓦器……26
　3．その他の土器……27
　(1)　須恵質土器……27
　(2)　瓦質土器……27
　(3)　土師質土器……29
　4．磁器……30
　(1)　青磁……30
　(2)　白磁……33
　(3)　天目……36
　(4)　染付……36
　5．陶器……38
　6．石製品……40
　7．金属製品……41
　8．土製品……41
　9．獣骨……42
Ⅴ．総括……43

（付編）小路遺跡出土の
　　石塔婆群……46

挿　図　目　次

Fig. 1　小路遺跡周辺地形・遺跡分布図…… 2
〃 2　小路遺跡調査区位置図……10
〃 3　小路遺跡Ⅰ区上層遺構配置図……13
〃 4　小路遺跡II区遺構配置図……14
〃 5　小路遺跡ＳＢ211 建物実測図……15
〃 6　小路遺跡ＳＢ214 建物実測図……15
〃 7　小路遺跡ＳＥ204 井戸実測図……16
〃 8　小路遺跡ＳＫ205 土壙実測図……17
〃 9　小路遺跡ＳＫ206 土壙実測図……18
〃 10　小路遺跡Ⅰ区下層遺構配置図……19
〃 11　小路遺跡ＳＢ304 建物実測図……20
〃 12　小路遺跡ＳＢ309 建物実測図……20
〃 13　小路遺跡ＳＢ310 建物実測図……21
〃 14　小路遺跡Ⅰ区下層溝跡断面図……22
〃 15　小路遺跡出土土師器・瓦器実測図……25
〃 16　小路遺跡出土須恵質・土師質・瓦質土器、瓦実測図……28
〃 17　小路遺跡出土青磁実測図……31
〃 18　小路遺跡出土白磁、天目、染付実測図……35
〃 19　小路遺跡出土陶器実測図……39
〃 20　小路遺跡出土石製品、金属製品実測図……40
〃 21　小路遺跡出土銅銭拓影……41
〃 22　小路遺跡出土土錘実測図……42
〃 23　小路遺跡出土石塔類実測図……47

表　目　次

Tab. 1　小路遺跡掘立柱建物跡一覧表……22

図　版　目　次

PL. 1 …… 小路遺跡Ⅰ区上層全景、小穴群
〃 2 …… 小路遺跡Ⅰ区上層土壙
〃 3 …… 小路遺跡II区全景、ＳＤ201 溝
〃 4 …… 小路遺跡ＳＥ204井戸、ＳＤ201東溝、ＳＤ202 溝
〃 5 …… 小路遺跡ＳＫ205・ＳＫ206 土壙
〃 6 …… 小路遺跡Ⅰ区下層全景
〃 7 …… 小路遺跡ＳＢ310 建物
〃 8 …… 小路遺跡ＳＢ310 建物、ＳＢ309 建物
〃 9 …… 小路遺跡ＳＢ310 建物柱穴
〃 10 …… 小路遺跡Ⅰ区下層溝跡
〃 11 …… 小路遺跡出土土師器（小皿）
〃 12 …… 小路遺跡出土土師器（坏）・瓦器
〃 13 …… 小路遺跡出土須恵質・瓦質・土師質土器
〃 14 …… 小路遺跡出土青磁
〃 15 …… 小路遺跡出土白磁、青磁
〃 16 …… 小路遺跡出土染付
〃 17 …… 小路遺跡出土陶器、墨書土器
〃 18 …… 小路遺跡出土石製品、金属製品、瓦、獣骨
〃 19 …… 小路遺跡出土石塔類
〃 20 …… 慶長・元禄・文化年間絵図

Ⅰ．小路遺跡の歴史的周辺

1．芦刈の由来

713年編集の『肥前風土記』の小城郡の条に郷七所とあるが、具体的に郷の名称を挙げていない。平安時代中期（10世紀中頃）成立したと考えられる、源順編の『和名類聚抄』の小城郡の条に、川上（加波加美）・甕調（美加都岐）・高来（多久）・伴部（止毛）の四郷名があがっている。川上は現在の大和町、甕調は現在の三日月町、高来は現在の多久市、伴部は現在の牛津町のそれぞれ一帯であると考えられている。

この伴部郷の一ヶ里で、芦の里と称していたのが、芦刈の名称の由来と考えられている。しかし当時は、浜枝川および芦溝の両大字地方のみであったとされる(1)。しかし、一方では平吉郷という藩政時代の名称から、土地が低平で芦（あし・よし）の繁茂した干潟荒野の影観に因んだもので、芦を吉の佳名に改変したものとする考えもある(2)。『御領中郡村附』によると、平吉郷内にはいる集落名を次のようにあげている(3)。

牛津本町、同新町、練ヶ里、柿樋瀬ヶ里、江津村、女田村、定原村、八枝ヶ里村、浜中ヶ里村、川越村、虎坊村、舎八ヶ里村、西道免村、東道免村、永田搦村、下古賀村、中溝ヶ里村、戸崎村、芦刈村

これによって、平吉郷が、現在の牛津町と芦刈町を含めた郷名であったことがわかる。また、現牛津町と一部三日月町にはいる、立石ヶ里、江里ヶ里、生立ヶ里、乙柳ヶ里、下江良ヶ里村、上江良ヶ里村、石木ヶ里をあわせて南郷と称し、南郷は幕末には平吉郷に合併させて平吉郷となる。この南郷も平吉郷もともに「異名芦刈ト云」と但書きがついていて、芦刈と称していた地域が、現在の芦刈町のみでなく牛津町の大部分と三日月町の一部分を含んでいたことが知られる。

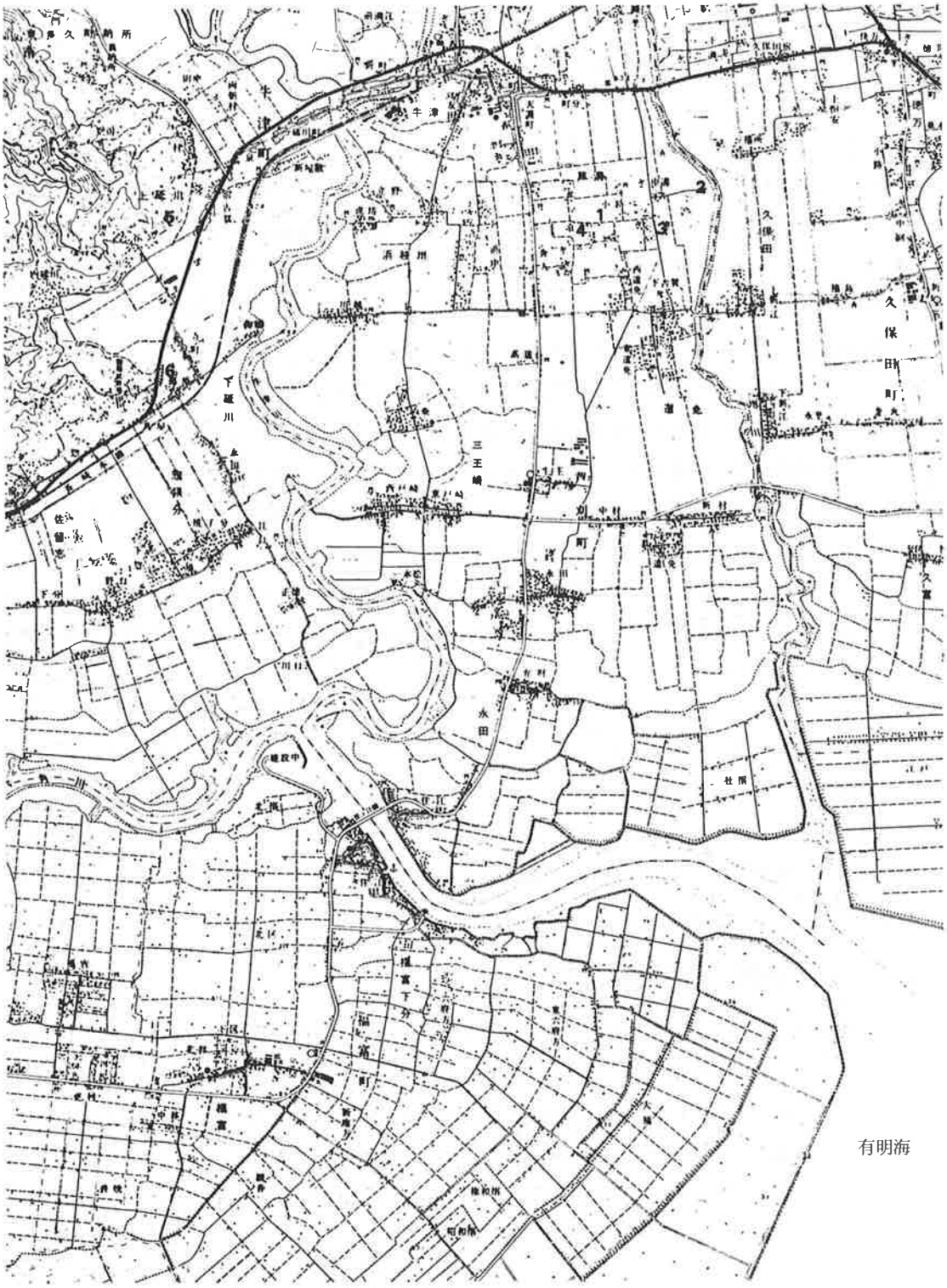
2．小路、中溝部落の成立

筑後川・六角川の土砂の堆積作用と有明海潮流の作用による、有明海の陸下が芦ヶ里を生成したものであるが、芦刈町地域における海岸線の南進状況は次のように考えられている(4)。

芦刈町の北端、即ち国道34号線付近は約2000年前の弥生文化期の海岸線と推考され、下古賀―西道免―舎人―浜中―八枝を結ぶ線は、自然陸化地の開墾から干拓に遷移する漸移地帯で、鎌倉時代の末期概ね1300年頃の海岸線、南の三丁井樋―新村―道免―永田―六丁―戸崎の線は戦国末期頃の概ね1600年頃の海岸線、さらにその南の松土居線は江戸時代初期の寛永、寛文（1624～1665）頃の海岸と考えられる。

このような海岸線の南進のもと、小路部落の発生は平安末期から鎌倉初頭の間と考えられている。これを推定させるものとして、小路の天満宮がある。社記によると建暦、建保の頃(1211

Fig. 1　小路遺跡周辺地形・遺跡分布図



1．小　路　遺　跡　　3．芦　刈　城　　5．川越（広厳）城

2．芦　刈　城　　4．御　館　跡　　6．八　幡　山　城

～1218）大宰府の天満宮から分請したものであるとする。一方、中溝部落は戦国時代の中頃（1500～1530）に発生したと考えられ、これを傍証するものとして、中溝の乙宮社が天文五年（1536）勧請された由緒がある[5]。

近世以後になると、古地図が残されており当時の小路、中溝の様子をうかがうことができる。「慶長年中肥前国絵図」により[6]、16世紀末から17世紀初頭の様子が知られるが、小路とか中溝という集落名称はなく、ただ、南郷（高2496石５斗）、牛津町、平吉郷（高7252石１斗２升）とあり、街道として長崎街道が記されている。ついで「元禄14年肥前国絵図」[7]をみると、17世紀末の様子を示すものであるが、集落名が記されており、芦刈村（434石余）、中溝ヶ里村(357石余）とある。この地図には、有明海に面して陸化のもっとも先端部に位置している。御米津ヶ里村、河越村、牛王ヶ里村、永田ヶ里村、福満弁財村が記されている。「文化８年平吉郷絵図」[8]では、19世紀初頭の様子をうかがうことができ、芦刈本村、中溝村の記載があり、集落の様子を詳細に書き記している。芦刈本村の中の、天満宮の西方に「館屋敷」の記載があり中世千葉氏一族・徳島氏の館の跡であるといわれ、「陣の森」とか「蝮森」とか今日称されている。芦刈本村は、文化８年の別図では、芦刈小路と記されており、現在の小路部落のことである。

３．鴨打・徳島・神代氏の遺跡

中溝部落には、臨済宗・南禅寺派の錦鏡山宝泉寺がある。本尊寺は薬師如来、開山は済川慶普和尚、開拓大檀那は鴨打陸奥守胤忠とし、永禄年間（1558～1569）の創建とされる。この宝泉寺境内は、四周を濠でめぐらされており、室町時代後半期に千葉氏の家臣鴨打氏が城（館）を築いて割拠していた場所とされている。通称、芦刈城跡といっている。広さは約二反四畝（24アール余）ある。寺の境内および外域には鴨打氏一族の墓石が存在する。鴨打氏の城跡とされるものは、このほかに中溝部落南部に位置する道昌山永林寺（曹洞宗・佐賀高伝寺末）・隣あわせて宮神社の境城がある。広さは約３町５反歩余（約3.5ヘクタール）あり、宝泉寺のほうに比較して格段に広い。永林寺は万治元年（1658）の開山である。今一つ、西道免部落にある「万部さん」境内も鴨打氏一族の墓石があり、鴨打氏と何らかの関係があるものと考えられている[9]。

さて、鴨打氏は元来松浦党の一派で、『松浦党鴨打家系図』[10]によってみると、松浦源太夫判官久の孫持の子至がはじめて鴨打姓を名乗っている。その契機は、「後鳥羽院の御守・上洛禁中警固・御寵愛の鴨、御池水に遊ぶ。干時、新鴨が飛来し嘴戦に及ぶ。走寄り扇を以て新鴨を打つ。叡感の余り鴨打氏を賜り、美濃守に任ず。」とされている。この至より12代後の鴨打美濃守秀に至ってはじめて、千葉氏の招きで芦刈に移住する。すなわち、「代々宇和場領主、此時初て松浦より小城郡に来って芦ヶ里に居城し千葉に一味す。大永５年10月18日卒去、宝泉寺殿無礙浄光大居士。」とある。大永５年は1525年にあたる。秀の子が筑前守胤宗で、千葉胤繁の娘

聟となり、胤の一字を受けて、松浦党本来の一字名前から二字名前にかわっている。胤宗の子が陸奥守胤忠で、龍造寺隆信の家臣として活躍する。元亀元年（1570）８月、鍋島直茂が大友の大軍勢（主将大友八郎親秀）を佐賀郡大和町の今山に夜龍をした折、胤忠は三人の子供（左馬大輔胤泰、左衛門佐胤房、太郎九郎胤純）とともに従軍し、大友方の林式部少輔を川上付近で討捕り、肥後侍の域越前守親冬を生捕りにしている。このほか、龍造寺および鍋島氏の軍勢として各所に戦って名を挙げている。慶長８年９月16日卒、90才、岔傅国日将大居士。元和３年（1617）、鍋島直茂は、孫元茂が小城藩を創設するにあたって83人の家臣を元茂に譲っている。この中に鴨打陸奥守胤忠の子胤房と胤純がいる[11]。19世紀前半、鍋島直堯代の『小城着到』[12]によれば、鴨打大之進（雍熙）が記載されており、平士、１代馬乗、物成23石、平原村居住となっている。鴨打氏は、小城藩の家臣になると、幾ばくもなく小城町平原村のほうに移住してしまう。墓所も小城町北浦村の尾辻という場所にうつし、寺も宝泉寺より松尾山光勝寺にかえている。

昭和49年４月、小路部落・松瀬地区の馬場和喜氏所有地から五輪塔・宝篋印塔など中世の石塔婆が出土した。早速、県教育庁文化課の木下之治氏、石隈喜佐雄氏が調査にあたられた。この調査の結果、「出土石塔婆は五輪塔と宝篋印塔の二種類で、塔の軸の部分や基礎にあたるものは地中に埋没したままになっている。」「珍しいものとしては、一石五輪塔（高さ約50センチ、横15センチ）が出土している。」「この石塔婆群は、その形式からみて室町時代末期の天正年間前後（約400年前）のものと推定される。」「出土地の西南方に、千葉氏の一族徳島氏の城（館）があったと伝えられる地域があるところから、戦国時代における武将たちの戦没者に対する追善・供養に関係するものが、この石塔婆群の中には多いのではないかと推定される。」以上の諸点を指摘された[13]。

「文化８年平吉郷絵図」の芦刈本村の中に「館屋敷」と記されている場所がある。この場所の東南方の地続きの地域を含めて、今日「珍の山」と呼んでいる。別に陣ノ森」とか「蝮森」ともよぶ。現在、畑地として残っているのは、約三反歩（30アール余）にすぎないが、この畑地を中心に約四町八反余（約4.7ヘクタール）の地所が城（館）跡と伝えられる。往時は四周を濠でめぐらしていたと考えられる。この城跡は、室町時代後半期に活躍した千葉氏の一族徳島氏の割拠した場所とされる。徳島氏の城（館）跡と伝える場所として、今一つ浜中部落の「つき山観音」とよぶ場所があり、当地も「陣ノ森」と称している。また、その東方、芦溝部落との境に「徳島堀」と称する堀がある。

小路部落の曹洞宗鶴鹿山福田寺は、徳島氏とゆかりの深い寺である。開基は徳島孫八郎盛秀妻室阿福である。阿福は、龍造寺山城守家兼の嫡子家純の娘で、夫の徳島孫八郎盛秀の没後剃髪して尼となり、玉室妙金大姉と称し、筑前周南林寺の松岩英祝大和尚を招じて本寺を開山したという。

徳島氏は、「徳島系図」[14]によれば、千葉胤鎮の孫義胤は、初名千葉弥太郎と称したが、はじめて徳島姓を名乗り、治部大輔を称し、小城郡平吉郷を知行して、芦刈に居住している。義胤の孫が治部大輔孫八郎盛秀である。妻室は前記の通り、龍造寺豊後守家純の娘阿福であり、福田寺の開基となる。永禄12年（1569）3月、豊後国大友義鎮の軍勢が佐賀の龍造寺隆信を攻めた時、隆信の配下にあった鍋島直茂は妻子を徳島盛秀に預けたとする。翌元亀元年（1570）8月の今山の戦いの時は、子供の治部大輔長房（信忠）を伴って参加している。今山の戦いの後も、龍造寺・鍋島軍の配下として各地に奮戦して、本領の芦刈のほかに筑後国にも土地を頂戴したという。治部大輔長房（信忠）の兄、左馬大夫胤順へのち土佐守、法名道可本幻居士）は、龍造寺氏と有馬氏の勢力争いの中の柳鶴の戦い（永禄5年・1562）に奮戦したという。胤順の曽孫に当るのが徳島長右衛門良親（初名秀之助）で、元和3年（1617）の鍋島直茂より孫元茂への83土譲人の中にはいっている。[15]19世紀前半の鍋島直堯代の『小城着到』[16]によれば、徳島健之丞（篤胤）が記載されており、馬乗士、物成77石、屋敷北小路となっている。徳島氏は小城藩の家臣となると、屋敷を北小路にもらい移住してしまう。

鴨打氏および徳島氏の小城移住の時期が何時かはっきりしないが、桜岡の小城藩邸を中心に侍屋敷としての小路が形成されるのは、延宝年間（1673～1680）であるので、これ以後のことであろうか。

小路部落の南部、字神代という地域がある。この一帯約3町5反余（約3.5ヘクタール）は、佐賀鍋島藩の親類神代家の「御館跡」であるといわれる。神代氏は元来川久保（佐賀市久保泉）一帯の土地を支配していたが、芦刈へ移住し、物成4500石となった。このあと慶長16年（1611）三部上地があり物成3150石となっている。これによって、神代氏の芦刈移住は慶長年間であることが推定される。[17]神代氏の芦刈領有は、『御領中郡村附』によると、芦刈村、練ヶ里、浜中ヶ里村（立野・高道・三条）となっている。福田寺は、徳島氏についで神代の菩提寺となっている。

以上、鴨打・徳島・神代氏による、中溝・小路（芦刈）地域の歴史およびその遺跡をみてきた。室町時代後半期に、何故、鴨打・徳島両氏が非常に近接した中溝・小路地区に割拠したのか。これは、当時龍造寺勢力と有馬勢力の接点が小城郡と杵島郡の郡境にあり、この郡境が六角川・牛津川の河口によってくびれ目となっていた。このくびれ目に近接する芦刈地区に割拠する鴨打・徳島氏は龍造寺勢力の前戦基地として重要な立場にあったとみるべきであろう。

4．『北肥戦誌』（九州治乱記）にあらわれた鴨打・徳島氏の活動

『北肥戦誌』とは、佐賀藩士馬渡俊継（新七入道加志）著による、蒙古襲来より豊臣秀吉の天下統一までの時期の北肥前、特に龍造寺氏、鍋島氏の動きをとらえた全30巻の歴史、戦記物語である。しかし、単なる戦記物ではなく、諸伝記・古文書を各地に尋ね歩き、史実を推敲し

たもので、特に室町時代の北肥前の様子をうかがい知るのに好資料とされている。享保年間に完成したものとされる。

(1) 天文14年（1545）正月の「龍造寺一家所々討死の事」条で

「同正月21日、芦刈の徳島在所へ、龍造寺より取懸け防戦の上破却す。此時徳島同名の輩七人、其外多く闘ひ死にけり。彼の徳島は、龍造寺には内縁ありし者なり。然れども当時千葉胤勝に属して、佐嘉の支配に従はず。仍りて佐嘉より攻めけるか。」

これは、龍造寺家兼（剛忠）が有馬・波多・鶴田・馬渡の各氏を敵にまわして戦い、戦い破れて佐賀城を攻囲された折のことである。「徳島は、龍造寺には内縁ありし者」とは、徳島孫八郎盛秀の妻室が、龍造寺家兼の嫡子家純の娘阿福であることを指すものであろう。龍造寺家兼は、同年3月には勢力をもりかえし、小城祇園城に馬場頼周を攻めるが、この時、千葉胤勝配下で鴨打陸奥守胤忠・徳島土佐守胤順・同孫八郎盛秀は龍造寺家兼に協力している。

(2) 天文20年（1551）10月の「大内義隆滅亡附龍造寺隆信没落の事」の条で

「此時小城郡芦刈に徳島左衛門大夫信安といふ者あり。徳島に養子にて、実は小田政光の子なり。小田は元より少弐方の者なりしかば、是も此騒動に佐嘉を攻めむと思立ち、少弐冬尚の舎弟晴気の千葉介胤頼を大将に取立て、軍兵を用意しけり、然るに彼が徳島の近辺に、鴨打陸奥守胤忠とて大勢の者あり。無双の勇士なりし故、徳島左衛門先づ彼等を語らひなんと思惟して、陸奥守が館へ赴き、心底の程を密議す。されども鴨打は、兼て龍造寺に志を通ぜし者にて、敢て徳島に一味せず。兎角答へて左衛門大夫を帰し、扱此事を隆信へ告げむと思ひ、急ぎ佐嘉へ赴きしが、道にて忙と思ひ出し、窪田民部大輔胤豊に知らせて、是をも同道すべしと、先づ窪田が館へ立寄りけり。然るに徳島・彼の鴨打が先へ廻って半途を遮り、鬨を咄と作る。陸奥守動転せず、家人共を下知して、徳島が軍兵と入乱れ、火花を散らし相戦ふに、左衛門大夫討負けて、手の者多く討たせ己が館へ引退く。陸奥守が家人江口若狭守・南里佐渡守・古賀因幡守、其外の者共、牛津江まで追討にし、鴨打も先づ帰宅して、事の次第一々佐嘉に於て隆信へ注進す。」

大内義隆が家臣陶晴賢に殺されたことは、大内氏と結ぶ龍造寺隆信の立場を危くした。龍造寺の家臣土橋加賀守栄益は、龍造寺鑑兼をたてて、大友氏、少弐氏に通じて、隆信を筑後国に追放してしまう。小田政光は少弐方であったため、政光の子であった徳島左衛門大夫信安は、反隆信の行動にでたのである。これに対して鴨打胤忠は隆信方として行動し、翌天文21年「鴨打陸奥守胤忠隆信へ忠心の事」の条に、「鴨打陸奥守胤忠、如何にしても隆信を先づ我が領内芦刈まで迎へたく思ひて、家人古賀因幡守に人数少々差副へ、一木に迎船をぞ遣しける。隆信大に悦あり、福地を先づ芦刈へ差遣し、時分を見計り相図の火を揚ぐべしといひ含め、其身は夫より一家の面々、家中の男女皆相共に類艘の船に乗り、芦刈の方へ漕ぎ何はれし処、天運未だ至らざるにや、俄に暴風強くして、供船共を悉く行方も知らず吹散らし、

隆信の乗船計り、辛々柳津留の入江に漕ぎ入らむとす。爰に鴨打が別腹の兄に、新左衛門胤資といふ者あり。兄弟仲悪くし、是は有馬へ従ひけり。然るに此胤資、隆信の船、追付芦刈へ著しく由聞付けしかば、急ぎ佐嘉蓮池の輩へ注進す。斯かりし程に、小田政光の家人山田河内守一騎駈に馳せ来り、新左衛門と一つになり、扨有馬より佐留志へ据え置きし代官高庭左馬助・本田源次郎・矢河某三人の者共へもいひ合せ、彼是数百騎乗りて、柳津留に待懸け、隆信唯今蓑船あらば、討取らむと我れ先にぞ争ひける。陸奥守是を見て、事成らずと思ひしかば、早速隆信の船に打向ひて、事の仔細を告遣し、古賀因幡守を船揖吏にて本の如く筑後へ漕返す。鴨打新左衛門、山田河内守是を聞き、手の裏の敵を討洩しけりと大に歯を噛み、舵て陸奥守を討たむとす。奥州疾く推量しければ、此若共と合戦詮なき事なりとつぶやき、塚崎の方へぞ退きける。又福地も鹿子村に至り、御厨安芸守を頼みて、下船津の村岡藤次左衛門が船を借り、隆信を慕ひて筑後の方へ渡海しけり。」とある。

隆信の佐嘉帰国は、翌天文22年７月のことであり、鹿江崎（佐賀郡川副町）に着船している。

(3) 永禄５年（1562）「有馬勢出張丹坂軍の事」の条に

「爰に其頃馬渡兵部少輔俊光といふ者あり。有馬方へ所縁ある者なりしが、今度隆信に対し向様忠を尽さむと思ひ、一族の野田右近允と密談して、有馬へ使を差遣す。有馬の輩、馬渡の方使とは夢にも知らずして、彼等が使に任せ、さらば先づ大将分一人砥河辺まで差遣し、龍造寺が領内を乱妨すべしと、則ち島原弥七郎に人数を添へ、船より砥河へ差向けけり。比兵船、既に柳津留の入江に漕ぎ入る。時に馬兵部少輔、兼ねて近隣の輩に言談し、牛尾山に相図の火の手を揚げしかば、東よりは鴨打、徳島数百人にて馳せ集り、西よりは、野田、乙成出合ひて、有馬船を中に取籠め、雨の降る如く散々に射る。島原を初め有馬衆、すは忻られつるよと動転し、漕戻さむとすれども相叶はず。或は船底に隠れ、或は干潟に飛込み、手向ふ者一人もなし。佐嘉方の地下人共、是を見て手を叩き声を揚げて猪鳴叫び、竹槍等にて突ひて廻るに、有馬勢百余人、目の前に討たれけり。されども大将島原弥七郎は、兎角して敵を払ひ、牛津江・大戸ヶ里まで兵船を進め、鴨打が家人と相戦ひしが、爰にて又有馬勢40余人討たれ、島原は遁れて退きけり。此時、鴨打が手の者も50余人討死しけり。斯くて比由、佐嘉へ注進す。隆信感悦せられ、馬渡へは新恩の地百町給はり、能登守信光と改名せられ、鴨打へは小城の右原八十町加恩あり。徳島以下の者共へも各恩賞給はりけり。」とある。

これは、大友義鎮（宗麟）が、少弐家再興を画策して、有馬・波多・大村氏などと連絡をとり、龍造寺隆信を攻略せんとした時、鴨打陸奥守胤忠、徳島土佐入道道可、同名治部大輔長房、同左馬助信盛らは隆信方につき、前掲資料の「柳津留の戦い」に参加する。そのあと、小城町三里の丹坂峠を中心として東西に分れての隆信と有馬、波多、大村などとの戦いにも参加している。

(4) 元亀元年（1570）８月「今山夜軍大友八郎親秀討たるゝ事」の条では、鴨打陸奥守胤忠および徳島などの小城一揆が鍋島直茂のもとで今山の夜襲に奮戦する。鴨打胤忠は、このあと直茂に従って多久梶峰城攻略にも参加している。

(5) 天正４年（1576）正月「隆信須古に移らるゝ並横造落城の事」の条では、徳島左馬助信盛が模造城（鹿島）攻略の道案内となり、鴨打胤忠・徳島甲斐守長房、同左衛門大夫信安らも活動している。徳島左馬助は論功行賞の折、筑後守となり、新恩地を給され、松丘の城（鹿島市浜）を修補して、入置かれている。

（註）

(1) 小城郡教育会編「小城郡誌」1934年　493ページ

(2) 芦刈町史編纂委員会「芦刈町史」1974年　65ページ

(3) 佐賀県立図書館蔵「佐賀鍋島家文書」

(4) 「芦刈町史」50ページ

(5) 「芦刈町史」68～69ページ

(6) 佐賀県立図書館蔵「天保八年写彩色手書」（234×249cm）

(7) 佐賀県立図書館蔵「元禄十四年彩色手書」（513×700cm）

(8) 佐賀県立図書館蔵「文化八年彩色手書」（478×240cm）

(9) 「芦刈町史」124～125ページ

(10) 鴨打氏（東京都在住）所蔵

(11) 「鍋島直茂公譜考補」巻十

(12) 着到とは侍名簿のことである。分限帳とも言った。

(13) 1974年４月20日に現地調査を行なった木下之治氏の調査記録による。この報告文は巻末に付編として掲載している。

(14) 佐賀県立図書館蔵「佐賀鍋島文庫」

(15) 註(11)に同じ

(16) 註(12)に同じ

(17) 『佐賀鍋島文庫』「御親類始諸家老迠家々之大概」

Ⅱ．調　査　の　経　過

1．調査に至る経過

昭和54年度の圃場整備事業の地区が確定し、芦刈町小路の俗称「珍ノ山」がその対象地区内に入っていたため、芦刈町教育委員会より依頼を受けた県教育委員会文化課は昭和54年1月8日と9日の2日間、当地の確認調査を実施した。その結果、現在の畑地全域にわたって遺構の存在が確認された。その結果をもとに工事担当者である県中部農林事務所と協議を重ね、国営水路の東側（II区）は一部畑団地として、水路西側（Ⅰ区）下層の水路予定地以外は遺跡は保存されることになった。従って発掘調査を実施すべき面積はⅠ区上層1570㎡、Ⅰ区下層 300㎡、II区 680㎡の計2550㎡と決定した。

発掘調査の開始時期が間近にせまった8月29日、芦刈町中央公民館において、事務局である町教育委員会、発掘調査を担当する県教育委員会文化課文化財調査第2係、文献調査の県立唐津東高等学校教諭岩松要輔などによる調査打合せの会がもたれた。

2．調査組織

調査主体者　芦刈町教育委員会

調査担当者　佐賀県教育委員会文化課

事務局

局　長	岡　善八	芦刈町教育委員会	教育長
次　長	楠田一次	芦刈町中央公民館	館長
庶　務	山口則幸	〃	主事
会　計	北島恵美子	〃	主事

調査員

調査責任者	木下　巧	佐賀県教育委員会文化課	文化財調査第2係長
調査員	七田忠昭	〃	文化財調査第2係（担当）
	川崎吉剛	〃	〃
	西田和己	〃	〃
	高山久美子	〃	〃

3．調査の概要

Ⅰ区は国営水路西側の標高3.28～3.80m、周囲水田面との比高0.46～1.07mの畑地で、面積約1570㎡の地区である。調査期間は8月29日～9月26日。現在の耕作土を30～50cm除去すると遺構面らしい層に達したので、一応全体をこの面で調査することにした。検出した遺構は土壙

Fig. 2　小路遺跡調査区位置図

7基、溝15条などであるが、遺構埋土中に中世～近世にわたる遺物が混在しており、また現代のビニール袋などが混入した遺構も多く、畑地の区割り畦畔と平行して走る溝などと考えあわせれば、ほとんどの遺構は最近の所産と考えられる。

出土遺物は中世～近世にわたる土師器、陶磁器、瓦などである。

II区は国営水路東側の標高3.40～3.54m、周囲の水田面との比高 0.7～0.84m の畑地で、面積約 680㎡の地区である。調査期間は8月12日～10月15日。II区では表土剝ぎの段階で1m以上下位の明確な遺構面まで排土した。遺構面の標高は約 2.3m。検出した遺構は掘立柱建物4棟、井戸1基、土壙7基、溝3条、柵1条がある。幅の広い南北方向のSD 201 溝を境にして西側に建物群、井戸、柵が、東側に土壙群が分布している。

出土遺物は中世から一部近世にわたるものである。土師器坏、皿類が多く、陶磁器には青磁、白磁、染付などの中国製品が多い。他には火舎などの瓦質土器、石製品も出土した。一括して多数の遺物を出土した遺構にSD 201溝とSK 205土壙がある。前者からは土師器の坏・皿類、瓦器碗などとともに、青磁碗・皿、白磁碗・皿などを出土し、後者からは土師器坏・皿類とともに青磁、白磁、染付などの輸入陶磁、硯・子持勾玉などの石製品、獣骨などを出土した。

I区下層はI区の北端を東方に走る水路予定地で面積約 300㎡の地区で、I区よりさらに約0.8m下位に遺構面がある。調査期間は10月5日～10月23日遺構面の標高は約2.9m で、II区と同時期に使用された面と考えられる。夥しい柱穴群から復原できる掘立柱建物は9棟以上（中には柵の可能性があるものも含む）であり、他に南北方向の溝を3条検出した。建物のうちSB 310 建物は7間×3間（13.65m ×7.2m）と大規模なもので、他の建物に比して柱穴も格段に大きく、遺存していた柱も径約35～40cmと太い。I区下層の建物のほとんどが東西棟で、その方向はSB 310 建物と同じ方向をとっていることは注意される。

出土した遺物の内容はII区とほぼ同じだが、高麗青磁や、出土例をほとんど聞かない「布銭」、外底部に花押を書いた磁器なども出土した。

発掘調査の記録類の整理、出土遺物の復元、実測図作成、整図、写真撮影などの作業は佐賀県文化財資料室で行なった。

Ⅲ．遺　　構

1．Ⅰ区の遺構（Fig 3　PL 1・2）

Ⅰ区では土壙7基、溝15条と多数の柱穴らしい小穴を検出した。

(1) 土壙

土壙には平面円形・長方形・不整形の3種類がある。各形態をA類・B類・C類とする。

A類　SK 119 土壙・SK 121 土壙・SK 122 土壙である。平面形態は円形で、断面円筒形の素掘りである。SK 119 土壙は長径1.85m・短径1.70m。深さは0.60m である。SK 121 土壙は長径1.35m・短径1.20m。深さは0.70m である。SK 122 土壙は長径1.50m・短径1.35m。深さ0.63m である。

B類　SK 116 土壙・SK 117 土壙・SK 118 土壙である。平面形態は長方形の素掘りである。

SK 116 土壙は中央部付近に集中する小穴群の東隅に存在する。南北1.40m・東西0.74m の長方形である。掘り方は素掘りである。深さは南側で0.58m・北側で0.51m・中央で0.61m と若干中央が低くなっている。

SK 117 土壙はSD 108 溝のすぐ北側に存在する。南北1.10m・東西1.0 m の長方形である。掘り方は素掘りである。深さは0.17m である。

SK 118 土壙は中央付近に集中する小穴群の北側に存在する。南北1.0 m・東西0.72m の長方形である。掘り方は素掘りである。深さは0.13m である。

C類　SK 120 土壙はSD 109 溝の西側に存在する。長径0.80m・短径0.68m の不整形である。掘り方は素掘りである。深さは0.03m と非常に浅く、壁はほとんど残っていない。

(2) 溝状遺構

本調査区において、溝は15条が検出された。すべてが東西、もしくは南北に走る。最も長い溝はSD 113 溝の32.6m で、最も短い溝はSD 111 溝の1.50m である。幅の最も広いのは、SD 109 溝の0.80～1.20m で、最も狭いのはSD 107 溝の0.25m であった。深さはほとんどが0.10～0.20m であるが、SD 113 溝が0.20～0.45m。SD 115 溝の南側で0.60～0.70m で、北側で0.15～0.30m で、南側が少しづつ深くなっている。断面形態は、すべて逆台形である。遺構埋土中からは、中世～近世の遺物が混入しており、また、現代のビニール袋が混入した溝も多くあった。

2．Ⅱ区の遺構（Fig, 4　PL. 3）

II区では掘立柱建物4棟、井戸1基、土壙7基、溝3条、柵1条と多数の柱穴を検出した。

(1) 掘立柱建物跡

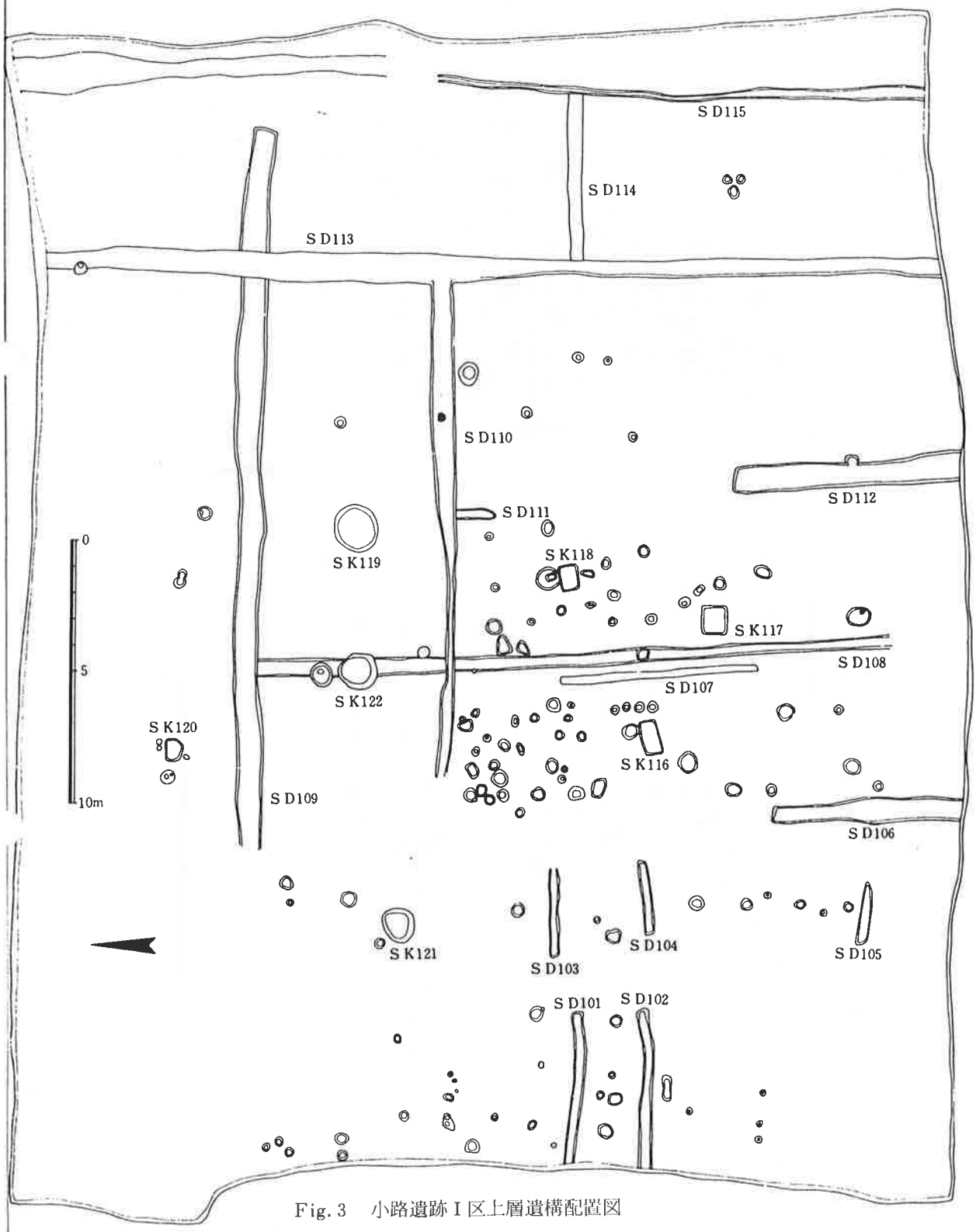


Fig. 3　小路遺跡Ⅰ区上層遺構配置図

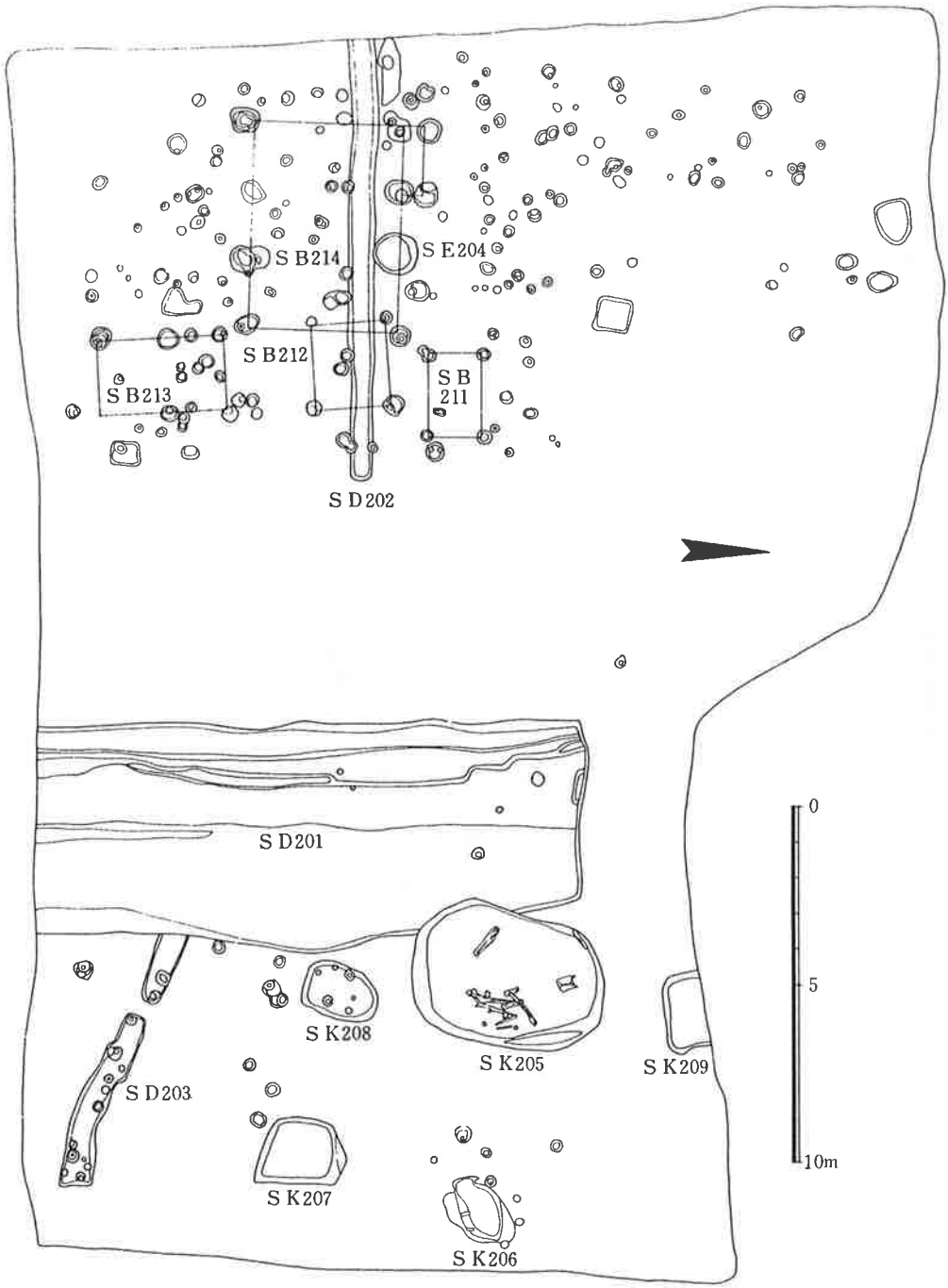


Fig. 4　小路遺跡II区遺構配置図

II区の西半部に集中して分布する。4棟の内訳は1間×1間の建物2棟、2間×1間の建物1棟、3間×1間の建物1棟である。南北棟のSB213建物を除けばすべて東西棟で、磁北とほとんど直角になっている。柱穴の規模はSB214建物以外は小さい。

SB211建物（Fig．5）

1間×1間の小規模な建物で桁行2.4m、梁行1.5m、総面積3.6㎡の東西棟（N—E90°）である。柱穴は平面円形か円形に近い楕円形で、径0.30～0.42m、深さ0.23～0.37mである。

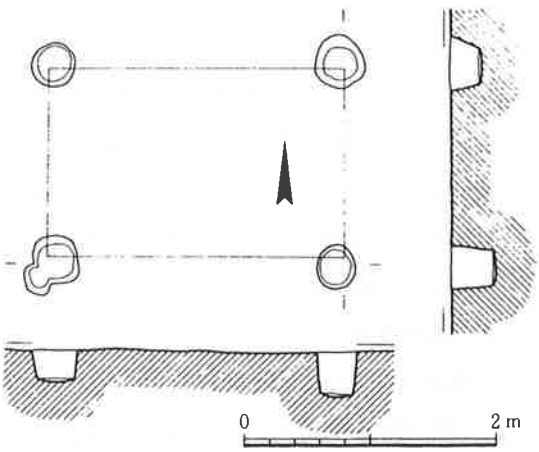


Fig.5　小路遺跡SB211建物実測図

SB212建物

1間×1間の小規模な建物で、桁行2.4m、梁行2.1m、総面積約5.0㎡の東西棟（N—E87°）である。柱穴は平面円形か円形に近い楕円形で、径0.30～0.58m、深さ0.35～0.53mである。

SB213建物

2間×1間の中規模な建物で、桁行3.6m、梁行2.1m、総面積約7.6㎡の南北棟（N—W3°）である。桁行柱間は1.8mの等間隔である。

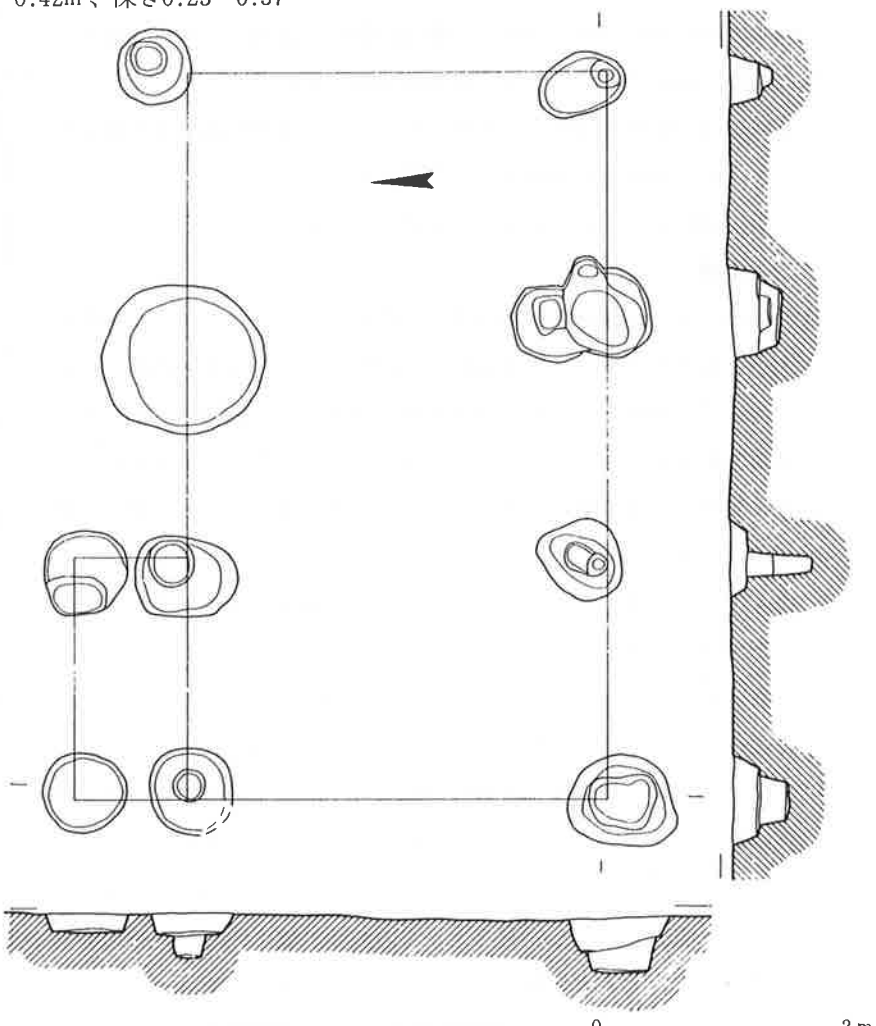


Fig.6　小路遺跡SB214建物実測図

柱穴は平面円形が円形に近い楕円形で、径0.40～0.60m、深さ0.30～0.45mである。

ＳＢ 214 建物（Fig．6）

II区では最も大規模な建物で、桁行5.85m、梁行3.3ｍ、総面積24.6㎡の東西棟(N—E90°)である。柱間は桁行で1.95mの等間隔になっているが、梁行では3.3ｍと間隔が大きい。東西側通り西端に東へ1間分、幅0.9ｍの張り出し部をもつ。柱穴は平面円形か円形に近い楕円形で径0.60～0.74mと比較的規模が大きい。深さは0.45m内外である。柱穴の1つはＳＥ204井戸によって壊されている。

(2) 井戸跡

調査区西部中央付近で1基検出したのみである。

ＳＥ 204 井戸（Fig．7　PL．4）

II区西半部掘立柱建物群の中に存在する。掘り方の平面は長径1.3ｍ、短径1.18mのほぼ円形で、断面円筒形の素掘りの井戸である。深さは2.98mと深く、下位では青灰色粘土層に掘り込んでいる。内部には井戸枠や井筒などはなかったらしく、木材の破片すら出土しなかった。ＳＤ202溝を切って構築されている。

出土品には土師器の小片と白磁皿ＣＩがある。

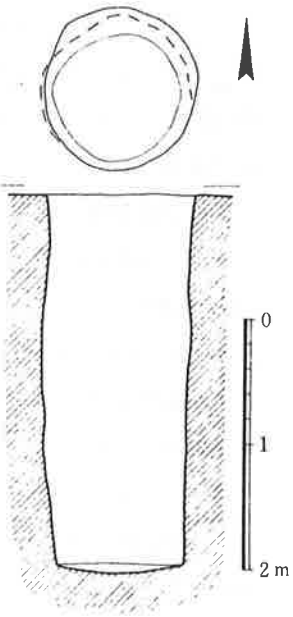


Fig.7　小路遺跡
ＳＥ204井戸実測図

(3) 土壙

II区の東部、ＳＤ201溝の東側に特に集中して検出した。規模は大小さまざまであるが、平面形は楕円形を基調とするものがほとんどである。ＳＫ205、207、209土壙は内部の土の堆積状況や、多くの灰層を含むことなどから、同じような性格をもつと考えられ、またＳＫ206土壙は壙の内部および周辺の土が焼けており、焚口と考えられるような2個の石の配置などから、窯のような性格をもつものと考えられる。まとまった出土品としてはＳＫ205土壙から出土した一括遺物がある。

ＳＫ 205 土壙（Fig．8　PL．5）

II区東半部中央北寄りに位置する大規模な土壙でＳＤ201溝を切って構築されている。南北に長い楕円形に近い平面形で、南北5.5ｍ、東西3.8ｍ。深さは南側で0.73m、北側1.02mと北部が低くなっており、底面は平坦になっている。壙の東壁中央付近に0.9ｍの間隔をもって径約10cmのクイ2本をほぼ垂直に打ち込み、さらに中央寄り0.9ｍ付近に幅1.0ｍの間隔で2本のクイを打ち込む。この4本のクイの周辺には径約8～10cm、長さ1.2～1.4ｍの丸太の木材が数本散乱していた。おそらくこの池状の壙に内部への突出部を作ったものだろう。土壙内には他にも丸太2本、板材1枚があった。埋土の土層はレンズ状に堆積しており、上部には茶褐色、黄褐色、灰褐色など褐色系統の土が薄く数層堆積し、それらの中に黒色灰層や茶色の木

が腐触した層などが入っている。下位は粘土質になっている。

出土品としては土師器小皿ＢⅠ・D、土師器坏CⅡa・CⅢ・DⅡ、染付皿D、染付碗Bb、瓦質土器火舎AⅠ、滑石製硯、滑石製子持勾玉、獣骨などがある。

SK206 土壙(Fig. 9 PL. 5)

Ⅱ区東端中央やや北寄りに位置する平面楕円形に近い不整形な土壙である。長径2.36m、短径1.38m、深さ0.23m。壙の南寄りの部分に長さ約20cmと28cmの細長い石をハの字形に置いている。壙内および周辺部にはワラ灰と思われるものが層をなして堆積している。その部分の灰は赤く焼けている。また北側には4個の柱穴が壙の北側を囲むように存在する。径約20～28cm、深さ約12～20cmの平面円形の小穴である。

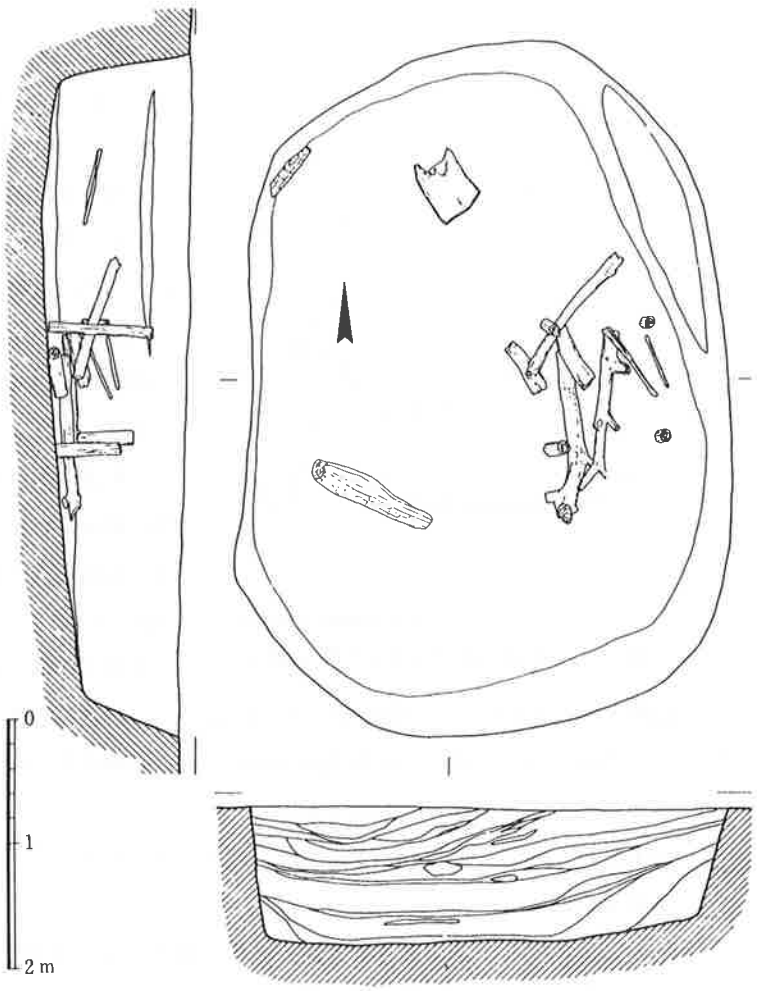


Fig. 8　小路遺跡ＳＫ205土壙実測図

内部からの遺物の出土は少なく、わずかに土師器片があるのみである。

(4)　溝跡

Ⅱ区では3条の溝が存在する。Ⅱ区を東西に二分する位置にＳＤ201溝、建物群の中にＳＤ202溝、土壙群の南方にＳＤ203溝が走る。まとまった出土品としてはＳＤ201溝出土の一括遺物がある。

ＳＤ201溝（PL．3・4）

幅5.6～6.0mと規模の大きい溝で、調査区南端から北方へ約15mで終結している。溝の方向はほぼ南北で、N—W1°。北端の部分に陸橋部をもち、さらに北方へ延びるかどうかは不

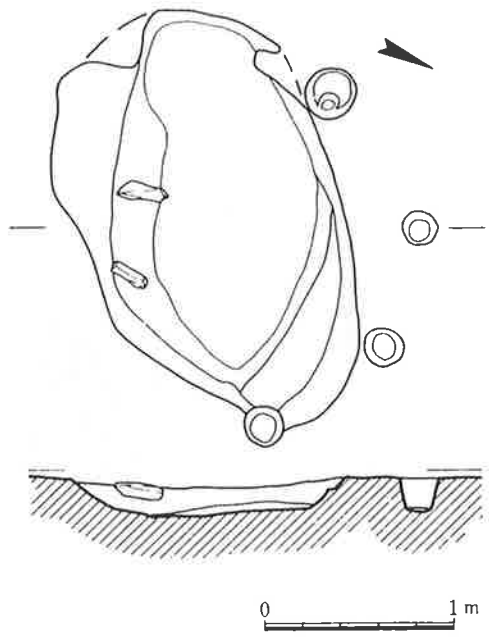


Fig. 9　小路遺跡ＳＫ206土壙実測図

明である。溝の内部は東西２条の溝で構成され、中央部は高まっている。東溝は幅２.６～３.５ｍ、深さ約1.10m、西溝は幅１.２～１.８ｍ、深さ約1.0mで、それぞれ壁は傾斜し、底は平面になる。東西溝ともに短期間に埋没したらしく、灰黄褐色礫混り土が充満するが、東溝の中央部よりはレンズ状に堆積する部分がみられる。

西溝からの出土品は土師器小皿Ａａ・Ａｂ、土師器坏ＡⅠ・ＡⅡ、瓦器碗Ａ、青磁碗ＡⅠａ・ＡⅠｂ・ＡⅡａ・Ｂｂ・Ｇ、白磁皿Ｆ、白磁碗Ｂなどで、東溝からは土師器小皿ＢⅠ・ＢⅡ、土師器坏ＣⅡｂ・ＤⅠ・ＤⅡ、瓦器碗Ｂ、瓦質土器蓋Ａ、青磁皿Ａ・Ｈ、白磁皿Ｃ・Ｅ、陶器鉢などを出土した。

ＳＤ 202溝（PL．４）

幅約0.60～0.80m、深さ約0.20～0.30mの溝で、調査区西端から東方へ12.3m延び終結している。方向はＮ―Ｅ89°とほぼ東西方向をとる。断面はＵ字形であるが、底は平面となる部分が多い。埋土はほとんど一層である。

出土品は土師器小皿ＢⅡ、土師器坏Ｃ、瓦器碗などである。

ＳＤ 203溝

幅0.70～0.90m、深さ0.08～0.20mと浅い溝であり、陸橋部をもつ。調査区東南隅よりＮ―Ｗ67°の方向へ約７ｍ延び、幅0.50mの陸橋をもち、さらに2.1ｍ延び、ＳＤ 201溝の部分で消える。ＳＤ 201溝より時期的に古いものである。断面は浅いＵ字形で、内部には柱穴らしい小穴が多い。

内部の小穴からは土師器小皿Ａａ、瓦器碗Ｂなどを出土した。

(5)　柵跡

ＳＤ 202溝の南側にＳＡ 215柵が並行して走る。

ＳＡ 215柵

ＳＤ 202溝に接するように南側に柵と考えられる柱穴が並ぶ。柵の西端は不明であるが、５個の柱穴、４間分迄確認できる。東は溝の先端よりやや西方から始まり、5個目の柱穴まで9.6ｍ、柱間は等間隔で2.4ｍである。柱穴の規模は小さく、径0.34～0.41m、深さ0.21～0.29mの平面円形のものである。方向はＳＤ 202溝と全く同一のＮ―Ｅ89°。

3．Ⅰ区下層の遺構

（Fig．10
PL．6）

Ⅰ区下層では調査面積が狭いにもかかわらず、建物を中心とする多くの遺構が存在する。掘立柱建物５棟、柱列で掘立柱建物と考えられるもの４棟分以上、溝３条の他多くの柱穴を検出した。なお遺構が存在する幅は東西約36ｍの間で、両側は次第に低くなり、遺構は存在しない。

(1) 掘立柱建物跡

Ⅰ区下層調査区全域にわたって分布する。調査区内で完結するもの５棟の内訳は１間×１間の建物２棟、２棟×１間の建物２棟、７間×３間の建物１棟である。他に東西側通りが５間のもの１棟、２間のもの２棟の建物と考えられる柱列があり、巨大なＳＢ 310

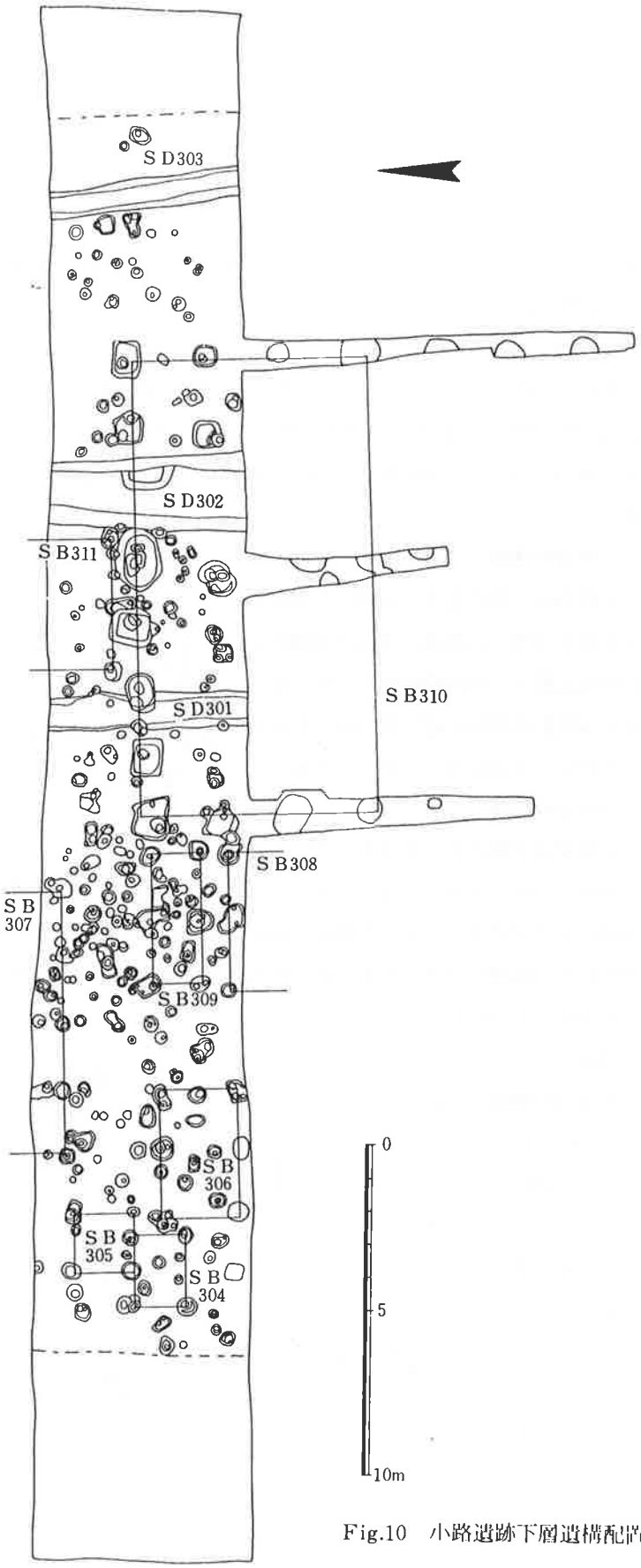


Fig.10　小路遺跡下層遺構配置図

建物の南側には、それに匹敵するような大規模な建物のものと考えられる大きな柱穴が存在する。ＳＢ 310 建物の柱穴は大きく、平面長方形のものもあるが、これとＳＢ 312 建物以外の建物の柱穴はほとんど規模が小さく、平面円形である。これらの建物の棟方向はすべてＮ―Ｅ88.5°の東西棟建物と考えられることは興味深い。

ＳＢ 304 建物（Fig．11）

Ｉ区下層西端に位置する１間×１間の小規模な建物で、桁行 2.1ｍ、梁行 1.5ｍ、総面積約 3.2㎡の東西棟である。柱穴は平面円形で、径0.46～0.60m、深さ0.38～0.72m である。

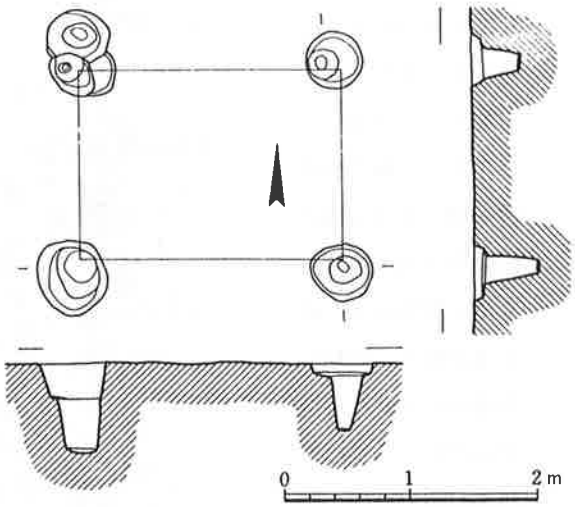


Fig.11　小路遺跡ＳＢ304建物実測図

ＳＢ 305 建物

ＳＢ 304 建物の北方に重複して存在する１間×１間の小規模な建物で、柱間1.8ｍの正方形で、総面積は約 3.2㎡。柱穴は平面円形か円形に近い楕円形で径0.36～0.60m、深さ0.30～0.54m である。

ＳＢ 306 建物

ＳＢ 304 建物の東に接する２間×１間の建物で、桁行 3.9ｍ、梁行 2.4ｍ、総面積約 9.4㎡である。桁行柱間は 1.8ｍ、2.1ｍと等間隔になっていない。柱穴は平面円形か円形に近い楕円形のものが多いが、西北隅と東南隅のものは方形ないし長方形に近い。径0.48～0.74m、深さ0.44～0.72m。

ＳＢ 309 建物（Fig．12　PL．8）

Ｉ区下層中央西寄りに位置する２間×１間の建物で、桁行 3.9ｍ、梁行 1.5ｍ、総面積約 5.9㎡である。桁行柱間は1.95m の等間隔である。柱穴は西北隅と東南隅のものが平面方形に近いが、他は円形を

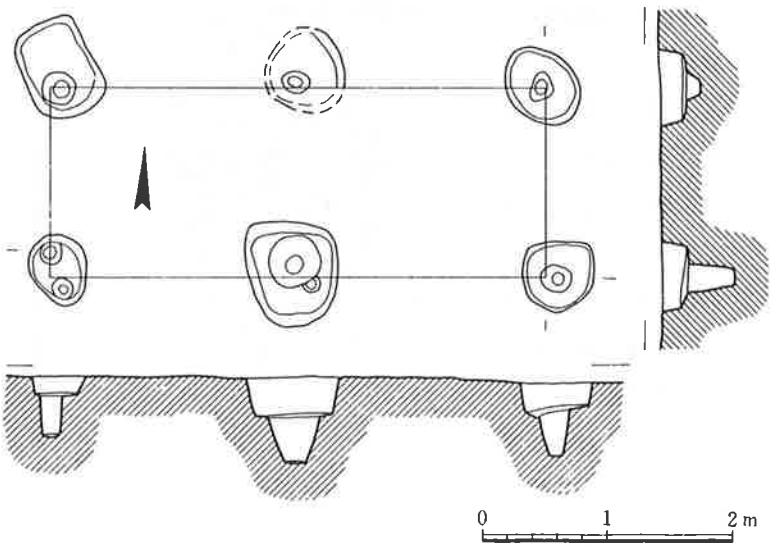


Fig.12　小路遺跡ＳＢ309建物実測図

基調とする。径（長さ）0.44～0.80m、深さ0.33～0.77m。

ＳＢ 310 建物（Fig．13　PL．7～9）

Ｉ区下層中央東寄りに位置する７間×３間の大規模な建物である。桁行13.65ｍ、梁行7.2ｍ、総面積約98.3㎡。桁行柱間は1.95m、梁行柱間は2.4ｍの等間隔である。柱穴の掘り方は長方形を基調とするものが多く、規模も残りが良いもので0.66m×0.74m～1.16m×1.30mと大きく、また北側通りの西から２・３番目の柱穴には径40cm内外の柱が残存していた。柱の先端はクイ状に尖っており、先端よりやや上位にえつり穴を穿っている。柱穴内に礎板などの痕跡はなかった。ＳＤ 301 溝を切って構築されているが、北側通りの柱穴１個はＳＤ 302 溝で破壊されている。

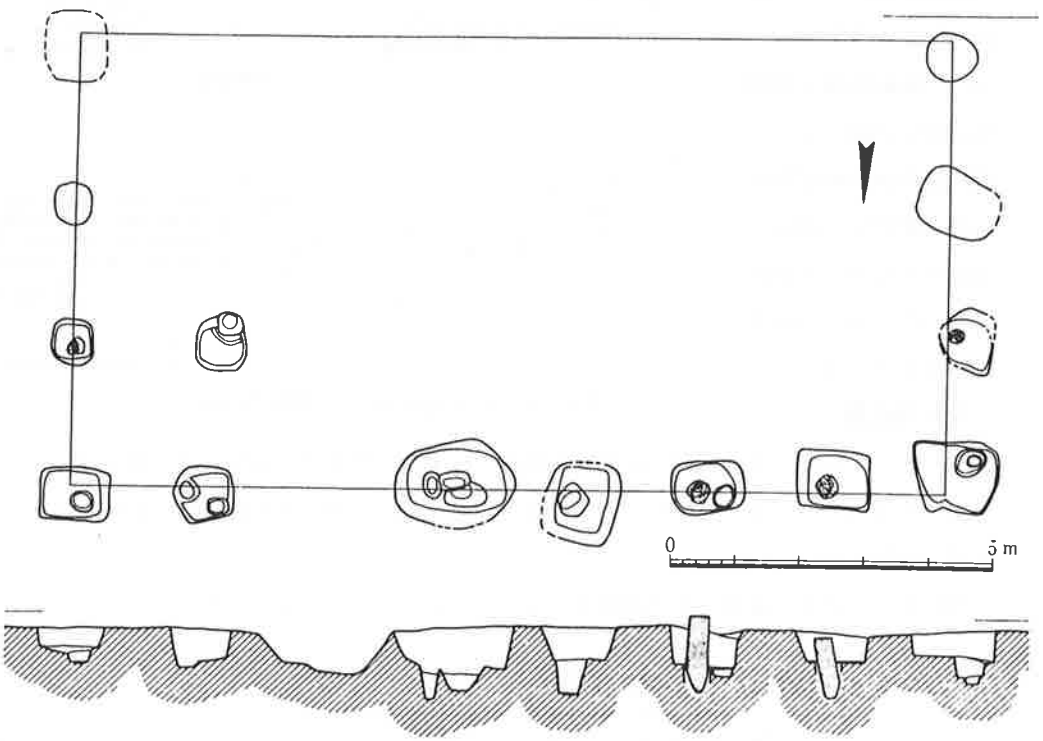


Fig.13　小路遺跡ＳＢ310建物実測図

(2)溝跡（Fig．14　PL．10）

Ｉ区下層中央部にＳＤ 301 溝、さらに約５ｍの間隔をもって東方ＳＤ 302 溝、7.5ｍの間隔をもって東方にＳＤ 303 溝が存在する。これら３条の溝は南北方向に走る。

ＳＤ 301 溝

幅0.9～1.0ｍ、深さ0.26～0.30mで、断面はＵ字状であるが底面は平面をなす。埋土はレンズ状に堆積しており、大きく上下２層に分かれる。方向Ｎ―Ｗ1.5°。ＳＢ 210 建物より古い時期の所産である。

遺物は主に上層からの出土が多く、下層の粘質土層中からは木片や竹片が出土した。遺物は土師器小皿Ａａ、土師器坏ＡⅠ、瓦器碗、青磁碗Ｂｂ・G、須恵質土器鉢・甕、陶器壺・石鍋などである。

ＳＤ 302 溝

幅1.8～3.2ｍ、深さ0.61～0.73m と南へ次第に幅を増す。断面はＵ字状であるが底面は平面をなす。東側中央には張り出し部があり、東壁底に沿って0.3～0.5ｍの間隔で径約5～10cmのクイ列が並ぶ。埋土はレンズ状に堆積しており、大きくⅠ・II・Ⅶ層の3層に分かれる。Ⅰ・II層はそれぞれ灰黄褐色と灰茶褐色の砂質土層で、Ⅶ層は黒色に近い粘質土になっている。方向は磁北方向である。

遺物は主にⅠ層とII層の上位より出土したが、下位の粘質土層中には木片が混っている。遺物は土師器小皿ＢII、瓦質土器羽釜・擂鉢、土師質土器鉢、青磁碗Ｂａ・C・D、白磁皿Ａ・Ｂなどである。

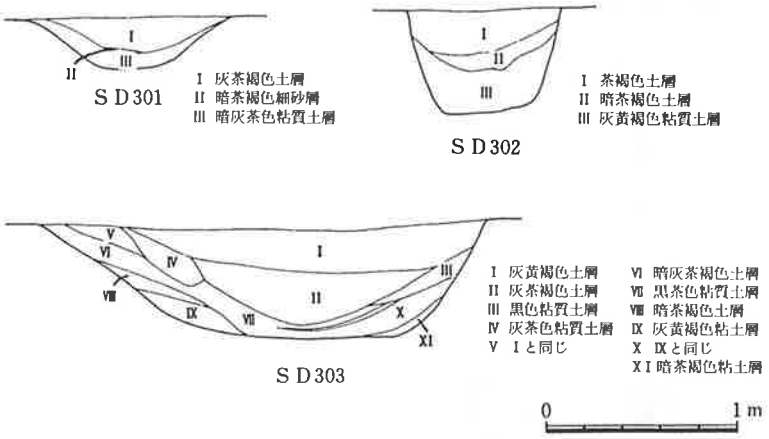


Fig.14　小路遺跡Ⅰ区下層溝跡断面図

ＳＤ 303 溝

幅0.9～1.0ｍ、深さ0.56～0.77m で断面はＵ字状で底面は平面をなす。埋土はレンズ状に堆積する3層よりなる。上位から茶褐色土層、暗茶褐色土層、灰黄褐色粘質土層となる。方向はN—W7.5°。

遺物としてはⅠ・II層より土師器などを出土したが、すべて小片であった。

Tab. 1 小路遺跡掘立柱建物一覧表

遺構番号	間数 (桁行×梁行)	棟方向	柱間 (m)		総規模(m)	総面積(m²)	時期
			桁行	梁行	桁行×梁行		
ＳＢ211	1×1	N-E90°	2.4	1.5	2.4 ×1.5	3.6	I
ＳＢ212	1×1	N-E87°	2.4	2.1	2.4 ×2.1	5.04	I
ＳＢ213	2×1	N-W3°	3.6	2.1	3.6 ×2.1	7.56	I
ＳＢ214	3×1	N-E90°	1.95	4.2	5.85×4.2	24.57	II

遺構番号	間数 (桁行×梁行)	棟方向	柱間 (m)		総規模(m)	総面積(m²)	時期
			桁行	梁行	桁行×梁行		
SB304	1×1	N-E88.5°	2.1	1.5	2.1 ×1.5	3.15	II
SB305	1×1	N-E88.5°	1.8	1.8	1.8 ×1.8	3.24	II
SB306	2×1	N-E88.5°	1.8+2.1	2.4	3.9 ×2.4	9.36	II
SB307	4×—	N-E88.5°	1.95	——	7.8 ×——	——	I
SB308	2×—	N-E88.5°	2.1	——	4.2 ×——	——	I
SB309	2×1	N-E88.5°	1.95	1.5	3.9 ×1.5	5.85	II
SB310	7×3	N-E88.5°	1.95	2.4	13.65×7.2	98.28	II
SB311	2×—	N-E88.5°	1.95	——	3.9 ×——	——	II

Ⅳ．遺　　物

小路遺跡から出土した遺物は土器、陶磁器、金属製品、石製品などである。これらは遺構別にみると土壙、溝からの出土品がほとんどで、ただ1基存在するＳＥ204井戸からはわずかな遺物を出土したのみである。

土器には土師器、瓦器、須恵質土器、土師質土器、瓦質土器などがあり、陶磁器には青磁、白磁、天目、染付など種類が多い。青磁は龍泉窯系統のものがほとんどであるが、中には高麗青磁や国産のものもいくつか存在する。白磁についても輸入品が多いが、李朝と考えられる白磁小皿は注意をひく。金属製品の出土は少なく、銅銭と鉄釜の二種であるが、明銭に混って唐の布銭も出土した。石製品はすべて滑石製品で、石鍋、硯の他再加工を施した子持勾玉も出土した。

上記遺物の他にＳＫ205土壙からは鹿などの骨が出土した。

1．土師器（Fig．15　PL．11・12）

土師器はすべてロクロ整形によるもので、小皿Ａａ、小皿Ａｂ、小皿ＢⅠ、小皿ＢⅡ、小皿Ｃ、小皿Ｄ、坏ＡⅠ、坏ＡⅡ、坏Ｂ、坏ＣⅠａ、坏ＣⅠｂ、坏ＣⅡａ、坏ＣⅡｂ、坏ＣⅢ、坏ＤⅠ、坏ＤⅡがある。

小皿Ａ（15～19）　平底に短かく開く口縁部がつくもので、底部と口縁部との境は比較的明瞭であり、口縁端部は丸くおさめる。口径と底径の差が小さい。外底部には糸切り痕が残り、中には板状圧痕がつくものもある。胎土には小粒の砂粒を含む。黄褐色～茶褐色。口径8.0～9.3cm、器高1.2～1.5cm。

小皿Ａは底部の形態の相違により小皿Ａａ（15～18）と小皿Ａｂ（19）に分類できるが、小皿Ａｂはわずか数点出土しただけで、製作過程で偶然にできた形態かも知れない。

小皿Ｂ（1～5）　平底に直線的に外に開く口縁部がつくもので、小皿Ａに較べ小型となり、口径と底径の差が大きく、後に述べる坏Ｃ類と同じ形態をとる。底部と口縁部との境は明瞭である。外底部には糸切り痕が残る。胎土にはあまり砂粒を含まないが、小さな雲母片を含むものがある。淡黄褐色～茶褐色。法量により小皿ＢⅠ、小皿ＢⅡに細分できる。

小皿ＢⅠ（3～5）は口径6.4～7.2cm、器高1.4～1.8cm。小皿ＢⅡ（1、2）は口径4.8～5.5cm、器高1.4～1.7cm。

小皿Ｃ（6，7）　平底にわずかに内彎しながら開く口縁部がつくもので、法量的には小皿ＢⅡ類に近い。しかし器壁が薄く、つくりが丁寧で、胎土には精選された粘土が用いられていることは特徴的である。外底部には糸切り痕が残る。6は淡黄褐色で、口径4.8cm、器高1.7cm。7は黒色に近い暗灰黄褐色で、口径5.4cm、器高2.0cm。

小皿D（8～14）　わずかに上げ底気味の平底に内弯しながら開く口縁部がつく。底部と口縁部の境は不明瞭なものが多く、全体として丸味をもつ。外底部には糸切り痕が残る。胎土にはあまり砂粒を含まないが、小さな雲母片を含むものもある。淡黄褐色～茶褐色。口縁部にススが付着しているもの（10）もいくつかあり、灯明皿として用いられたことがうかがえる。また14には外底部中央に「シ」の墨書がある。口径5.4～6.5cm、器高1.3～2.0cm。

坏A（31～38）　大きな平底に内弯気味に開く体部、口縁部がつくもので、口径と底径の差は小さい。外底部には糸切り痕が残り、板状圧痕がつくものもある。胎土には若干砂粒を含む。黄褐色のものが多いが、灰茶褐色のものもある。法量により杯AⅠ、AⅡに分かれる。

坏AⅠは大型のもので口径13.0～17.2cm、器高2.2～3.6cmであるが、特に口径は14.2～14.8cmの中に集中するものが多い。AⅡは小型のもので口径11.0cm、器高2.6cm。

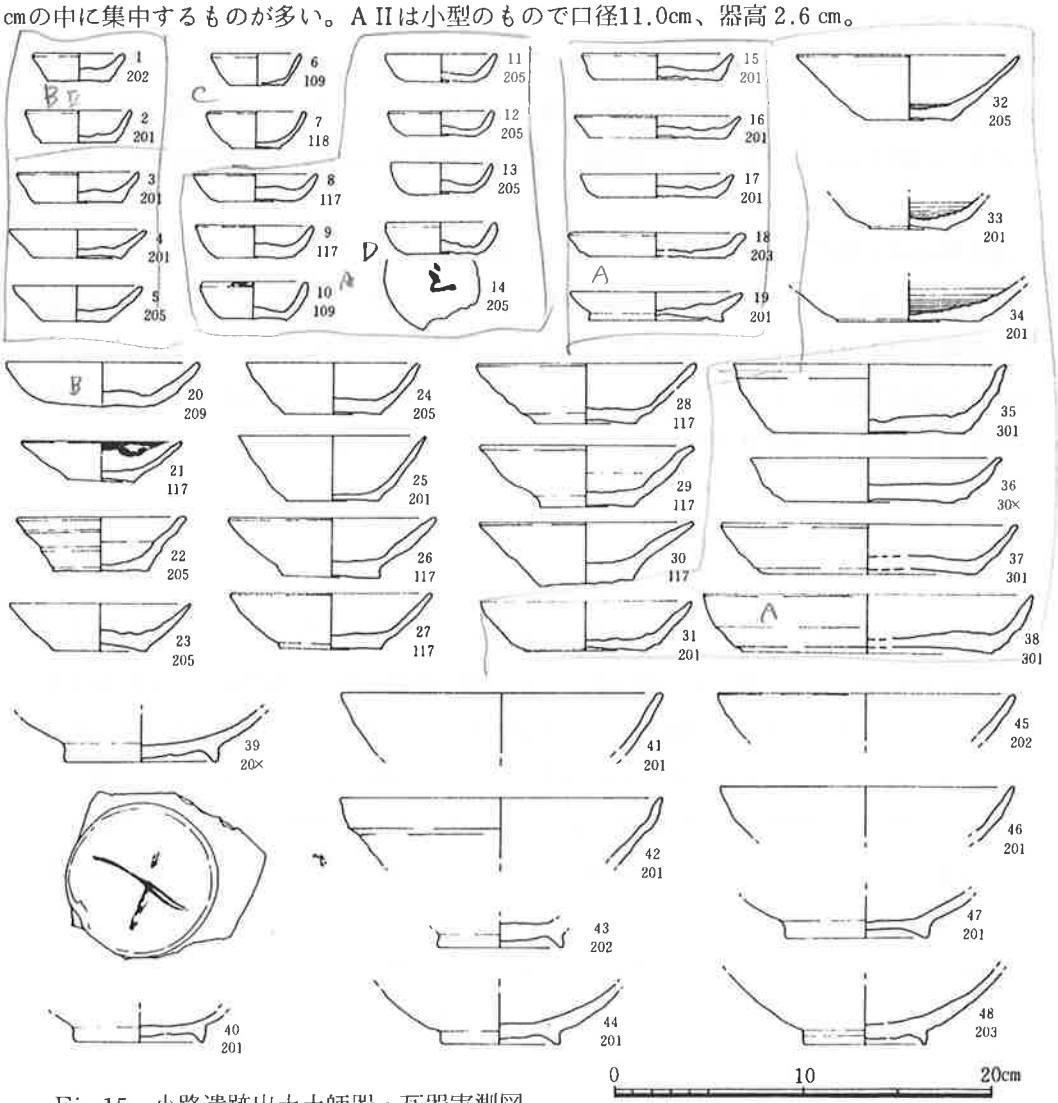


Fig.15　小路遺跡出土土師器・瓦器実測図

坏B (20)　出土数が少ない。平底に丸味をもちながら開く体部、口縁部がつくもので、外面は底部と体部の境が不明瞭である。外底部には糸切り痕が残る。胎土にはあまり砂粒を含まない。黄褐色。口径10.3cm、器高2.3 cm。

坏C (21～30)　口径に較べ径が小さい平底の底部にほぼ直線的に開く体部、口縁部がつく。外底部には糸切り痕が残るが、板状圧痕がつくものはない。底部と体部の境は稜をもち明瞭である。胎土にはわずかに砂粒を含むが、ほとんどのものには小さな雲母片が含まれる。茶褐色のものが多い。法量により坏C Ⅰ、C Ⅱ、C Ⅲに分類でき、坏C Ⅰと坏C Ⅱは細部の形態の相違により坏C Ⅰa、坏C Ⅰb、坏C Ⅱa、坏C Ⅱbに細分できる。

坏C Ⅰa (26～29) は大型のもので、体部は直線的なものである。口径10.7～11.3cm、器高3.0～3.3cm。坏C Ⅰb (30) は坏C Ⅰaと同法量であるが、体部がやや外反する。坏C Ⅱa (22～24) は中型のもので、口径8.9～9.5 cm、器高2.5～2.8 cm。坏C Ⅱb (25) は坏C Ⅱaの器高が大きくなったものであり、器壁が薄く、丁寧なつくりである。坏C Ⅲ (21) は小型のもので、口径8.4、器高2.1 cm。口縁部にススが付着するものもあり、灯明皿として用いられたことが分る。

坏C類の中で坏C Ⅰb、坏C Ⅱb、坏C Ⅲは出土数が少ない。

坏D (32～34)　形態的には坏C類に似るが、底径が小さく、体部も長くなる。内底部中央から体部内面下位にかけて、らせん状の沈線がめぐる。胎土には全くと言って良い程砂粒を含まず、色調も肌色に近い淡い黄灰色と、他の土師器とは明らかに区別されるべき一群である。法量により坏D Ⅰ、坏D Ⅱ (32, 33) よりかなり大型となる可能性が強い。坏D Ⅱは口径11.6 cm、器高3.5 cm。

2．瓦器 (Fig．15　PL．12)

瓦器はロクロ整形による高台付きの碗だけが出土した。完形品はないが、全体の形態はほぼうかがい知れる。大きく開く口縁部はわずかに内側へ屈曲させ、外面体部との境に稜をもつ。内外面にヘラミガキを施す。外底部に糸切り痕が残るものもある。高台に2種あり、碗A、碗Bに分類できるが、胎土にほとんど砂粒を含まず、やや黄味がかった明るい灰色～暗灰色と同一である。碗Aは口径17cm内外。碗Bは口径15.5cm内外器高は不明であるが、比較的浅くなると考える。44は暗灰色であるが、内底部見込みの部分が高台径と同じ大きさに灰白色になっており、重ね焼きしたことがうかがえる。

碗A (39～44)　底部から口縁部にかけてわずかに内彎しながら外に開く器体に高台がつく。高台は細めで、先端は丸いものが多いが44は面取りする。

碗B (45～48)　高台が幅広となり、先端は丸い。

3．その他の土器（Fig．16　PL．13）

土師器、瓦器以外の須恵質土器、土師質土器、瓦質土器がある。

(1) 須恵質土器

須恵質土器には鉢、甕がある。

鉢（1）　口縁は大きく開き端部は垂直に立上る。ロクロ調整で、胎土は砂粒を含み、口径28.4cm。

甕（2）　逆L字形口縁がつく。端部上面はつまみ上げている。外面は灰をかぶっている。胎土は砂粒を含む。口径38.6cm。

(2) 瓦質土器

瓦質土器には、蓋、鉢ＡⅠ、鉢ＡⅡ、鉢ＡⅢ、鉢Ｂ、擂鉢、羽釜、土鍋、火舎ＡⅠ、火舎ＡⅡａ、火舎ＡⅡｂ、火舎ＣⅠ、火舎ＣⅡがある。

蓋（3）　天井部は非常に浅く、口縁部は若干下る。口縁端部は面取りをしてある。かえりは口縁端部より内方につけてある。つまみは断面台形で、下位に穿孔してある。外面ナデ、内面、ハケ目とナデで調整して端部をヘラ切りしている。色調は灰色で砂粒を含む。口径16.6cm。

鉢Ａ（4～6）　体部から口縁部にかけてはほぼ直線に外上方へ開く。口縁端部で変化しないもの（ＡⅠ）外反するもの（ＡⅡ）内彎するもの（ＡⅢ）に分かれ、法量によって分類できる。内外面ともハケ目調整である。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は灰色～暗灰色である。

ＡⅠ（6）は口径25.4cm。ＡⅡ（5）の口径は23.0cm。ＡⅢは口径18.0cm。

鉢Ｂ（14）　片口鉢である。体部から直線に外上方へ広がる。内面はハケ目、外面をナデで調整。わずかに砂粒を含む。色調は乳白色である。

擂鉢（7，8）　底部からほぼ直線に外上方へ立上る。内面はハケ目、外面はハケ目とナデで調整。わずかに砂粒を含む。色調は灰色から黒灰色である。（7）の口径は25.0cm（8）の口径は29.5cmである。

羽釜（9，11）　(10) は土師質と思われるが、同形態であるので、ここで述べる9は頸部から若干内彎ぎみの短かい口縁をもつ。外面には、山型のスタンプがある。またナデで調整している。内面はハケ目とナデによって調整している。砂粒を少し含み、赤褐色である。口径11.2cm。10は頸部がわずかに残存、外面に2コの菊花文と横棒による櫛描文と一条の沈線がある。内面はナデによって調整されている。砂粒を少し含み、灰色である。11は胴部に付く鍔の部分が残存、胴部はやや内傾する。鍔は断面長方形で水平に付く。鍔は横ナデで外縁は面取りしている。胴部内面はロクロによる横ナデ。鍔はススが付着している。色調は黒色で砂粒を若干含土。

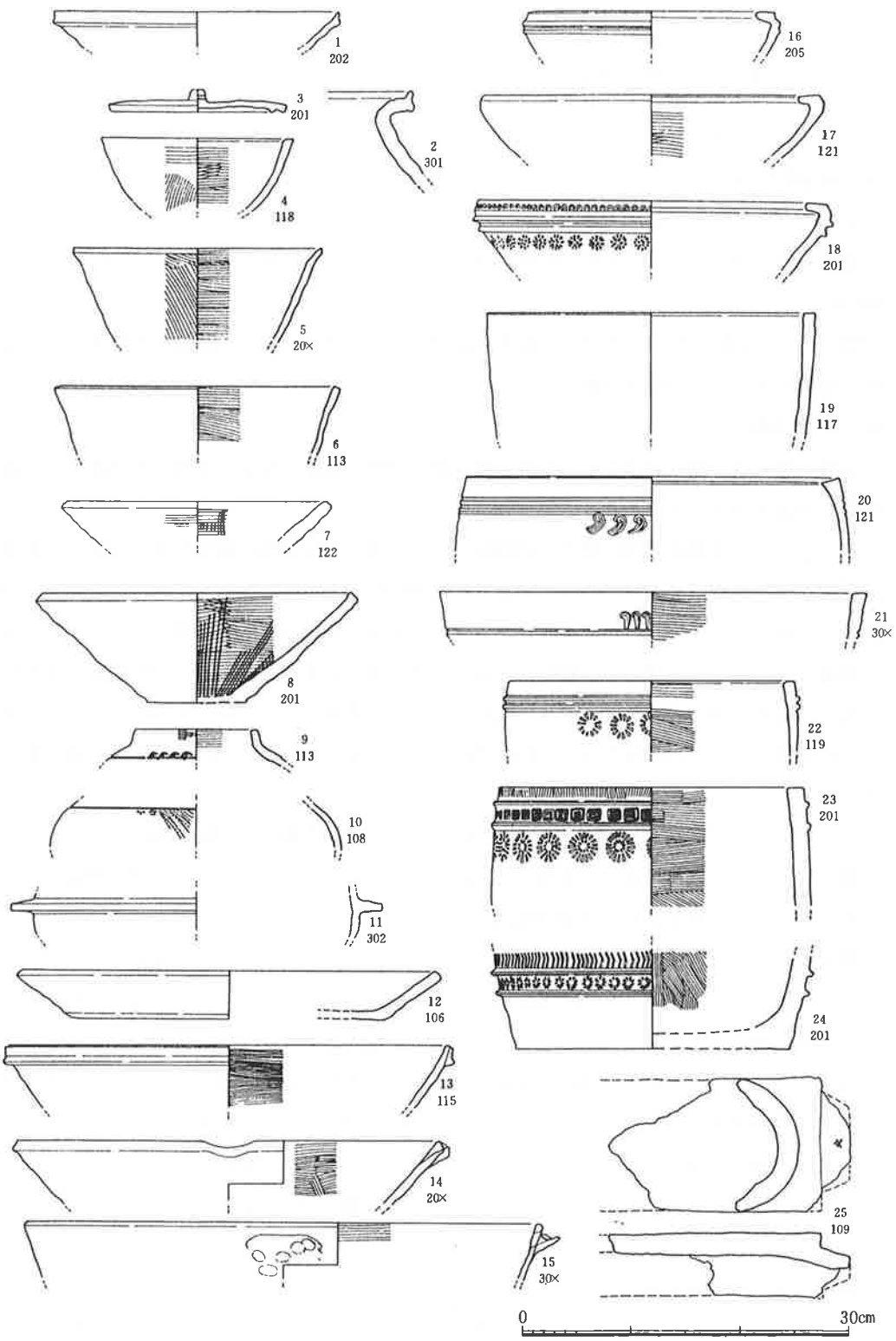


Fig.16　小路遺跡出土須恵器・土師質・瓦質土器・瓦実測図

土鍋（15）　口縁部がわずかに残存。口縁端部から約10cm下断面三角形の鍔が、上向きで付く。口縁と鍔の間に焼成前に内側から穿孔した孔が２コある。鍔から下の体部外面は、指で荒くおさえた痕が残り、接合部が明瞭に残る。内面は、ハケ目とナデで調整している。色調は灰白色から黒色で、砂粒は含まない。口径47.2cm。

火舎A（16～18）　口縁部が内側に大きく張出し、L字状口縁から底部に向ってほぼ直線になっている。法量によってＡＩ（16）とＡII（17，18）に分類でき、ＡIIはスタンプのないものＡIIａ（17）とあるものＡIIｂ（18）に分けることができる。

火舎ＡＩ（16）は口縁部がL字状をなし、ほとんど砂粒を含まない。色調は淡茶褐色で口径23.0cm。火舎ＡIIａ（17）は全体の形態は火舎ＡＩとほとんど同じである。口縁端部は面取りしている。調整は、外面を横ナデ、内面をハケ状の工具による横位ナデである。体部と口縁の境目の内面を指で押えた跡が明瞭に残る。色調は黒色。砂粒を含み、口径31.8cm。火舎ＡIIｂ（18）は２重の円文を口縁最上位に施し、断面三角形の凸帯２条の下に２重の菊花文のスタンプをめぐらす。色調は灰色、砂粒を含み、口径32.0cm。

火舎B（19）　体部から垂直に立上る口縁部がつく。色調は黒色、砂粒は含まず、口径30.4cm。

火舎C（20～24）　火舎Cは法量によって火舎ＣＩ（20，21）と火舎ＣII（22～24）の２種類に分類できる。

火舎ＣＩ（20，20）には口縁が内彎するもの(20)とそうでないもの(21)がある。前者は、３本の沈線がありその下位に勾玉状の文様がスタンプしてある。口径34.4cm。後者は、１本の沈線の上位に勾玉状の文様がスタンプしてある。口径39.6cm。外面はナデ、内面は横位のハケ目である。火舎ＣII（22～24）には２本の凸帯の下位に菊花文のスタンプをめぐらすもの（22）と２条の凸帯の間に雷文のスタンプをめぐらし、その下位に２重の菊花文のスタンプがめぐり、凸帯の上位に縦位のハケ目を施すもの（23）がある。前者の凸帯の上、下に沈線が１条ずつめぐる。両者とも外面はナデ、内面は横位のハケ目。砂粒を含み、口径26.4cm(22)と22.0cm(23)で色調は灰色である。24は底部である。２本の凸帯の間に菊花文のスタンプをめぐらし、その上位に逆く字状の沈線をめぐらしている。外面はナデ、内面は縦位のハケ目。色調は赤茶色で砂粒を含み、底径25.4cm。

(3)　土師質土器（10，12，13，14，19，24）

土師質土器には羽釜（10）、盤（12）、鉢（13）、火舎ＣII（24）があるが10．19．24については瓦質の項で述べたので省略する。

盤（12）　平底より外反しながらゆるやかに外上方へ向う口縁をもつ。底部外面は、ヘラ削り、体部外面はナデ、内面は横ナデで調整している。体部外面にはわずかにススの付着がみられる。色調は黒灰色で、砂粒を含む。口径39.3cm。

鉢（13）　粘土の貼り付けのある口縁をもつ。外面をナデツケ、内面をハケ目で調整してある。色調は暗褐色で砂粒を含む。口径40.3cm。

4．磁器（Fig．17・18　PL．14～16）

磁器には青磁、白磁、天目、染付などがある。

(1) 青磁（Fig．17，PL．14）

青磁には皿A、皿B、皿C、皿D、皿Ea、皿Eb、皿Ec、皿F、皿G、皿H、碗AIa、碗AIb、碗AIIa、碗AIIb、碗Ba、碗Bb、碗C、碗D、碗E、碗F、碗G、碗H、瓶Aなどがある。

これらのうち皿F（10）は国産品と考えられ、碗1（34）と瓶（33）は高麗青磁である。他はほとんど中国産と考えられる。

皿A（1～3）　上げ底気味の平底から体部は中位で屈曲し、口縁部はわずかに外反する。器壁は比較的薄い。内面体部と見込みの境に段がつく。見込みには櫛状の施文具による複雑な文様を施こす。外底部は釉をかき取っている。胎土は灰色で、釉は1が灰色がかった緑色、2・3が灰色味がつよい緑色であるが3は光沢がない。口径11.0～11.3cm。器高1.4cm内外。

皿B（4）　皿Aとほぼ形態的に類似するが大型となる。口縁部の外反もほとんどなく体部外面屈曲部の稜が鈍くなり、内面見込みと体部との境の段も小さくなくなる。見込みには細かなヘラによる陰刻の花文を施す。外底部は釉をカキ取っている。胎土は灰白色の良質なもので、釉は灰色がかった緑色であるがムラがある。口径12.8cm、器高2.8cm。

皿C（5）　高台つきの小型の皿である。厚めの底部から体部は上方に彎曲する。高台は削り出しで、先端は丸い。釉は厚く、高台部分までかかり、外底部はかき取っているが、中央部には一部釉が残る。胎土は灰色の良質なもので、釉は明るい緑色。全体に貫入が多い。口径8.7cm、器高2.8cm。

皿D（6）　口縁部が外反する高台付きの小型の皿である。器壁は厚く、釉も厚めである。胎土は白灰色の良質なもので、釉はやや灰色がかった緑色である。全体に貫入が多い。口径10.7cm。

皿E（7～9）　口縁部が外反するもので、皿Dに較べ大型で、器壁は薄い。形態の相違で皿Ea、皿Eb、皿Ecに分類できる。

皿Ea（7）は口縁部外反の度合が小さいもので、体部は丸味をもって屈曲する。胎土は白灰色で、釉は緑色がかった灰色で、体部屈曲部以下は露胎である。口径14.0cm。皿Eb（8）は口縁部の外反がつよいもので、体部に屈曲部をもたない。内面見込みと体部との境には段がつく。胎土は灰色で、釉は厚めで、灰色味のつよい緑色である。口縁部内外と見込みの部分に青色の線をそれぞれ1条染付を施す。口径13.9cm。皿Ec（9）は外へ折れ曲る口縁部の端を

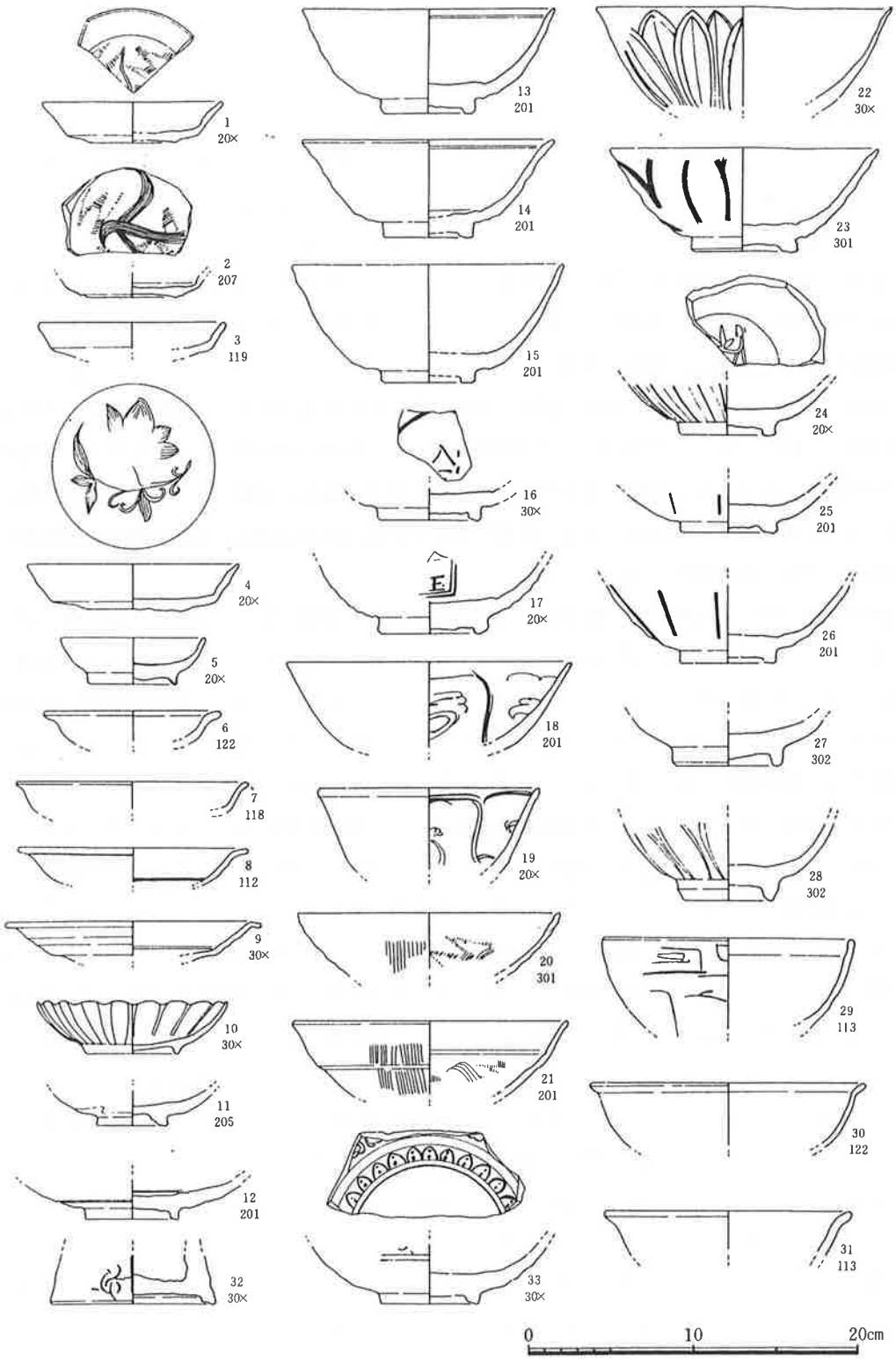


Fig.17　小路遺跡出土青磁実測図

上方へつまみあげたもので、外面にはヘラ削りの痕跡が残る。体部中位で屈曲し、内外面に段がつく。胎土は黄色味のある灰色で、釉は緑色がかった茶黄色。全体に細かな貫入が入る。口径15.4cm。

皿F（10）　輪花皿である。体部は内彎しながら外へ開く。輪花は19あり、花弁の部分が外へふくらむ。胎土は白色の良質なもので、釉は明るい灰緑色。釉は細かな気泡を含む。高台畳付部のみ露胎。型作りの国産品であろう。口径11.6cm、器高3.2cm。

皿G（11）　底部の破片である。径が小さな高台のやや外側から体部はわずかに屈曲する。高台は外に開くもので、内側を深く削っている。胎土は淡褐色で良質ではなく、釉は青灰色。体部下位以下は露胎。高台径4.4cm。

皿H（12）　底部の破片である。直立する高台部分から体部はわずかに内彎しながら大きく外へ開く。器壁が厚く、大型品となる可能性がつよい。胎土は灰白色の良質なもので、釉は明るい灰緑色。見込みには沈線を1条めぐらせ、その内部は釉をかき取っており、見込み中央にはヘラで文様を施す。高台畳付部までは釉がかかり、高台内側は露胎。露胎の部分は茶褐色に酸化している。高台径5.7cm。

碗A（13～19）　器壁の厚い底部から体部はゆるやかに内彎しながら開き、口縁部はわずかに外反する。高台は断面コ字形に近いもので、外側を斜めに削り取っている。見込みは周囲に段がつき、一段盛り上ってみえる。胎土は白灰色～灰色の良質なもので、釉は緑灰色、灰緑色、深みある灰緑色、やや茶色がかった緑色など様々で、全体に貫入があるものが多い。法量により碗AⅠ、碗AⅡに分類でき、さらに見込みを除く内面に文様がつくものとつかないものに分かれる。高台畳付部およびその内部は露胎であるが、一部畳付部に釉がかかるものもある。

碗AⅠa（15～17）は内面に文様のつかないもののうち、大型のものである。内底部見込みに「金玉満堂」のスタンプやヘラ書きの花文を施すものがある。15は口径16.5cm、器高7.0cm。碗AⅡa（13．14）は碗AⅠaがやや小型となったもので、13は灰色胎土で、釉は緑色で全体に細かめの貫入がある。口径15.3cm、器高6.2cm。碗AⅠb（18）は内面に文様がつくもののうちの大型のものである。内面口縁部直下に1～2条の沈線をいくつかに区切ってめぐらせ、その連結部から下方に施されたS字状あるいは逆S字状の沈線によって内面をいくつかに仕切り、その中に飛雲文を施す。胎土は白灰色で、釉は明るい緑灰色。口径17.2cm。碗AⅡb（19）は小型のもので、胎土は灰色の良質なもので、釉は緑色。口径13.4cm。

碗B（22～26）　器形は碗Aに類似する。体部外面に蓮弁文を施す。見込みの段は消失するか、または不明瞭な沈線となる。胎土、釉調など碗Aと同様、様々である。高台畳付部およびその内部は露胎であるが、一部畳付部に釉がかかるものもある。蓮弁文が鏑蓮弁のものを碗Ba、蓮弁の周囲をヘラによる沈線により縁取りしたものを碗Bbとする。

碗Ba（22．24）の22は胎土は灰色の良質なもので、釉はやや黄味がかった灰緑色で光沢が

ある。内外面に大きな貫入がある。口径17.4cm。24は同様な胎土であるが、釉は深みのある灰緑色で、見込みにヘラ描の花文を施す。碗Ｂｂ（23．25．26）は蓮弁の弁が幅広くなる。胎土は26が灰色であるのに対し、25は白色に近い灰黄色。碗Ｂｂに較べ、胎土、釉ともに質が悪い。

碗C（27）　底部の破片である。高台は外側を斜めに削るが、丸味がある。見込みと体部の境は不明瞭で、見込み中央にスタンプ状の花文がつく。胎土は灰白色の良質なもので、釉はやや茶色がかった緑色の厚いもので、全体に貫入がある。高台畳付部までは施釉されており、高台内側から内部は露胎で、茶褐色に酸化されている。31の様な外反する口縁部がつくと思われる。

碗D（28）　底部から体部下半の破片である。高台は外側を斜めに削っているが、全体的に丸い。体部は内彎しながら開く。見込みと体部の境は不明瞭である。外面にヘラ描の沈線で縁取られた蓮弁文がつく。碗ＡⅠ程度の法量と思われる。胎土は灰白色で細かな砂粒を含み、釉は明るい緑灰色で厚い。高台は内側まで施釉されており、高台の内部を、外底部中央を除いて釉をかき取っている。

碗E（29）　底部を欠く。体部は内彎しながら上方に開き、口縁部は丸く仕上げる。器体外面にヘラ描きの文様を施す。口縁部直下に雷文帯をめぐらせ、体部には蓮弁様の文様を施す。胎土は灰白色で、釉は明るい灰緑色で、やや厚めである。内外面全体に大きめの貫入がある。復元口径15.0cm。

碗F（30）　口縁部から体部にかけての破片である。内彎しながら開く体部に屈曲して外反する口縁部がつく。胎土は灰色で、釉は緑灰色で浅い。復元口径14.5cm。

碗G（20．21）　底部を欠損する。体部は上位で内側へわずかに屈曲する。屈曲部の内面には沈線を１条めぐらせる。外面にはタテ方向に櫛描文を入れ、内面には櫛描のジグザグ文とヘラによる文様を施す。胎土はわずかに黄味のある灰色の良質なもので、釉はやや黄味がかった灰緑色で光沢がある。内面口縁部付近に貫入がある。20は復元口径15.8cm、21は16.6cm。

碗H（33）　底部から体部下位の破片である。器壁の厚い底部から、体部は内彎しながら開く。高台は断面コ字形に近いもので、内側を上方へ削っている。内外面に白土象嵌による文様を施す。内面には見込み周囲の線の外側に蓮弁文を施し、さらに２条の線の上位に唐草文を施す。外面体部下位にも２条の線とその上位に唐草文を施す。胎土はやや濃い灰色で、釉は灰色がかった緑色で、外面には細かな貫入が入る。全面施釉されている。高台径 5.8 cm。

瓶A（32）　いわゆる梅瓶の底部付近である。体部下端は内側を削って、高台としている。体部は下位で内傾し、やがて外へ開くものである。外面には白土象嵌による文様を施す。胎土はやや茶色がかった灰色の良質なもので、釉はわずかに茶色がかったうす緑色で、細かな貫入がある。畳付部には粗い砂が付着しており、外底部には薄く釉がかかる。復元底径 9.8 cm。

(2) **白磁**（Fig．18　P　L．15）

白磁には皿A、皿B、皿CⅠ、皿CⅡ、皿D、皿E、皿F、碗A、碗B、碗C、蓋Aがある。すべて輸入品と考えられる。皿A、皿B、碗Cの一群とその他の一群とは胎土、釉調とも異質である。

皿A（34～37）　高台付きの小型の皿である。厚めの底部から、体部はわずかに内彎しながら外に開き、口縁端部は丸くおさめる。高台は幅広で四足を残すように削り取ったものである。内底部には4ヶ所目痕が残る。重ね焼きの大量生産品と思われる。胎土はわずかに黄味がかったもので、微細な黒色粒を含み、軟質のものと硬質のものに分れる。釉は白色から淡い灰黄色。全面施釉のもの（34．35．37）と体部下位から外底部まで露胎のもの（36）があり、他に高台外側まで施釉されたものもある。ほとんどのものが全面に細かな貫入があるが、一部貫入がないものもある。36は口径9.2㎝、器高2.2㎝と小型であるが、他は口径8.0～9.1㎝、器高1.8～2.4㎝とほとんど同法量である。

皿B（38）　底部の破片である。底部は厚く平坦で、やがて上方へ開くものと思われる。高台は幅広の断面コ字形に近い形態のものである。内底部見込みの周囲には細い沈線1条をめぐらす。胎土は淡い黄白色で、微細な黒色粒を含む。釉はわずかに黄味のある白色で外面は体部下位より外底部にかけて露胎。全体に貫入がある。高台径4.2㎝。高台内側には花神とみられる墨書がある。

皿C（39～42）　径の大きい高台部から体部は内彎しながら開き、口縁部は外反する。底部の器壁は薄い。胎土はわずかに灰色がかった白色で、釉は白色でわずかに緑色がかったものもある。法量により皿CⅠと皿CⅡに分類できる。

皿CⅠ（41）は大型のもので、高台は外側は内へ削り、内側は直立する。高台下位から畳付部は釉をかき取っている。口径16.0㎝、器高3.1㎝。皿CⅡ（39．40）は小型のもので、高台畳付部は釉をかき取っているが、砂粒が付着する。40は口径12.6㎝。器高2.4㎝。

皿D（43）　口縁部から底部にかけての小片である。底部は薄く、体部は高台部から外反しながら大きく開き、口縁部は丸くおさめる。胎土はわずかに灰色がかった白色の良質なものであるが、底部付近は黒色に近い灰色になっている。釉はわずかに灰色がかった白色で、高台部下位は釉をかき取っている。復元口径15.7㎝、器高2.8㎝。

皿E（44）　高台部から体部下位の破片である。厚めの底部から、体部は内彎しながら外に開く。高台は断面コ字形。内底部見込み周囲には沈線を1条めぐらす。丁寧なつくりの皿である。胎土は灰白色で、釉はわずかに緑色がかった灰白色で厚い。高台畳付部に一部釉がかかるが、内側は露胎である。高台径5.8㎝。

皿F（45）　高台の付かない皿である。平底から体部は直線的に開き、外側に段をもつ口縁部はわずかに外反する。胎土は白色の良質なもので、釉は不透明の乳白色。全面に施釉されるが、口縁部付近は釉をかき取っている。口径11.4㎝、器高3.6㎝。

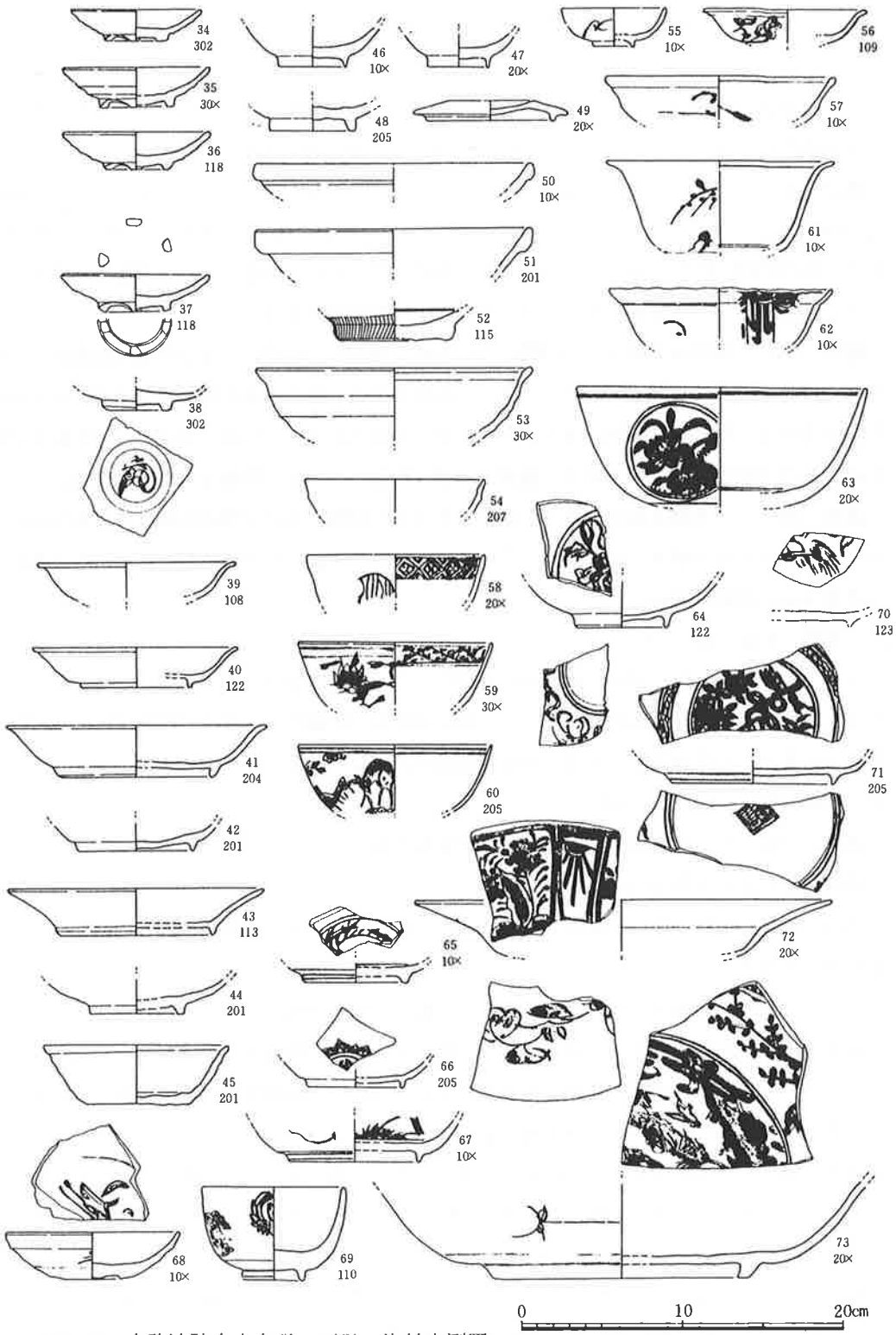


Fig.18　小路遺跡出土白磁・天目・染付実測図

碗A（46．47）　体部下位から底部の破片である。厚めの底部から、体部は内彎しながら外上方へのびると思われる。高台は径が小さく、細いものである。胎土は46が灰白色、47が白色で、釉は前者が緑色味をおびた白灰色、後者がわずかに緑色味をおびた灰白色である。高台畳付部は釉をかき取っており、細かな砂粒が付着する。46は高台径4.2㎝。

碗B（50～52）　50．51は口縁部の小片である。玉縁となっている。胎土は灰白色で、釉は黄色味をおびた灰白色である。復元口径は両者とも約17.2㎝。52は玉縁をもつ碗につく底部であり、高台内側の削りが浅く、高台外側から体部下位にかけて櫛描状の逆く字状の文様をめぐらす。体部内面下位に沈線をめぐらす。外面は露胎の底径7.4㎝。

碗C（53）　底部を欠損する。内彎しながら開く体部に、屈曲して外反する口縁部がつくが、口縁部は肥厚する。体部外面にはヘラ削りの痕跡が残る。胎土は黄色味の強い灰黄色のややや軟質のもので、釉はほぼ透明である。全体に細かな貫入がある。口径17.0㎝。48は断面コ字形の高台がつく底部の破片で、胎土、釉調とも53に類似している。畳部より内部は露胎。

蓋A（49）　天井部上面はくぼみ、稜がつき下方へ屈曲する口縁部の端部は丸くおさめる。口縁部内側に下方へ小さなかえりがつく。胎土は白色で、釉はやや緑色がかった白色である。口径9.4㎝、器高1.2㎝。

(3)　天目（Fig．18）

1点（54）出土した。碗の口縁部付近の破片である。内彎気味にのびてきた体部に上方へ立ち上ってわずかに外反する口縁部がつく。胎土は明るい灰黄色で、釉は口縁部付近に茶褐色の部分があるが、下位は黒色となる。口縁端部は光沢がない。復元口径11.0㎝。

(4)　染付（Fig．18　PL．16）

青磁、白磁、天目以外の磁器として染付の類がある。

器形などにより分類を行なった。

皿A、皿B、皿C、皿D、皿E、皿F、皿G、碗A、碗Ba、碗Bb、碗C、碗D、碗E、碗Fなどである。

これらのうち、碗Bb、碗F、碗G、皿B、皿D、皿Fは輸入品と考えられる。

皿A（55）　小型の盃状の小皿である。内彎する体部に、断面コ字形の小さな高台がつく。胎土は白色で、釉はわずかに青味をおびた明るい灰白色。全面施釉で、体部外面には青味がかった茶色で、文様を施す。口径6.3㎝、器高2.3㎝。

皿B（56）　底部を欠く。染付のある小皿である。内彎しながら外に開く体部に外反する口縁部がつく。胎土は灰色で、釉は緑灰色で全面に大きな貫入がある。体部外面に草花文を施す。文様は灰色がかったあせた青色。口径9.9㎝。

皿C（57）　体部下半から底部を欠く。わずかに内彎しながら開く体部に玉縁状の口縁部がつく。胎土は灰白色で釉は緑灰色。全面に貫入がある。内面口縁直下に1条の線を、体部内外

面に濃い青色で文様を施す。口径13.9cm。

皿D（71）　体部から口縁部を欠く。高台は径が大きく断面三角形に近いもので、内側が直立する。胎土は白色の良質なもので、釉はわずかに空色がかった白色である。濃い藍色で見込みに果文を描き、その周辺には雲形繋ぎ文をめぐらす。外底部には銘を入れる。高台径10.0cm。口径は16cm内外になろう。

皿E（72）　底部を欠く。比較的大型の芙蓉手の皿である。体部は中位で屈曲して大きく外に開く。胎土は白色で、釉はわずかに黄色味をおびている白色である。薄れた青色で、外面には草花文、内面には芙蓉手の染付を施す。口径25.5cm。

皿F（73）　大型の皿である。口縁部を欠く。径が大きい高台部から体部は内彎気味に開き、口縁部付近で外反する。高台は幅広い断面コ字形で、内側へ傾く。胎土は白灰色で良質なもので、釉は明るい黄白色である。外底部に露胎の部分がある。高台畳付部には砂粒が付普する。藍色で内外面に草木様の不鮮明な文様を施す。高台径15.7cm。

皿G（68）　厚めの底部は外庭部を削っただけのもので、体部は上位で外面に稜をもつ。胎土は黄白色で釉は灰黄色で全体に貫入が入る。底部は釉をかき取っている。見込みには船らしい文様を施す。口径10.7cm、器高2.8cm。

碗A（69）　厚い底部から体部は上方に直線的にのびる。高台は先端が丸い。胎土は灰白色。釉は灰白色で、あまり光沢がない。外面には薄れた青色で鶴丸文、松様の文様を交互に3個ずつ施す。口径8.8cm、器高5.6cm。

碗B（58～60）　すべて底部を欠く。体部下半は内彎するが、上位は直線的である。口径12cm内外の碗であるが、壁の厚さにより碗Ba、碗Bbに分類できる。

碗Ba（58）碗Bbに較べ器壁が厚く、釉も厚い。胎土は白色で、釉は黄味をおびた白色で、あまり光沢がない。青色で内面上位に菱繋ぎ文を施す。口径10.9cm。碗Bb（59．60）は器壁が薄く、釉も薄くかけられている。胎土は白色で、釉はわずかに青味をおびる白色の光沢をもつものである。60は口縁端部が露胎。59は外面に濃い藍色で唐花文様の染付を施す。口径11.8cm。60は外面に濃い藍色で鹿の染付を施す。口径11.8cm。

碗C（61）　底部を欠く。深みのある碗で、口縁部は外反する。胎土は白色で、釉はやや黄色がかっていて、全体に貫入が入る。外面には藍色で梅（？）と岩による風景画を施す。口径13.6cm。

碗D（62）　底部を欠く。内彎気味の体部上位は外に屈曲するが、口縁部は内彎する。口縁は輪花になっている。胎土は白色で、釉は青味をおびた白色である。口径13.4cm。

碗E（63）　大型の碗である。底部を欠く。内彎して立ち上る体部上位は直線的である。胎土は灰白色で、釉はわずかに青味をおびる白色である。外面には藍色で花文を施す。口径17.5cm。

碗F（64）　体部下位から底部の破片である。器壁は薄く、高台も細めのものがつく。胎土は灰白色で、釉は青味をおびた灰白色である。高台畳付部は釉をかき取っている。高台径 5.6 cm。口径は14cm内外となろう。

5．陶器（Fig．19　PL．17）

陶器には皿、碗、壺、水注、蓋、甕などがある。

皿（1～3）　1は高台付の皿で外上方へ立上る口縁で、端部が丸味をもっている。高台の畳付部をのぞいて全体にムラのある釉がかかっている。色調は釉が緑がかった灰白色。胎土は淡赤褐色。口径10.0cm。砂粒を含む。2は高台付の皿である。畳付部をのぞいてムラのある釉がかかっている。底部内面に重ね焼の痕跡がある。色調は釉が灰白色。胎土が淡赤褐色。底部径 5.2 cm。砂粒を含む。3は高台付皿である。畳付部をのぞいて釉がかっている。色調は釉が茶褐色、胎土が淡赤褐色で砂粒を含む。

碗（4）　高台付碗である。底部外面以外は内外面とも釉がかかっている。色調は釉が暗茶褐色。胎土は茶褐色である。砂粒を含む。

壺（5～8）　5はわずかに底部が残存する壺である。内外面ともロクロによるナデで調整している。底部内面は平底からわずかに垂直に立ち上がりすぐ内彎しながら外反する。色調は内外とも暗茶褐色で若干砂粒を含む。底部径 5.6 cm。6は頸部から内彎しながら外反し口縁部になり端部で外方へ大きく屈曲する。頸部外面に2条の沈線がはいる。内外面とも黒茶褐色の釉がかかる。胎土は淡赤褐色である。砂粒を含む。復元口径は12.6cm。7は底部より外反し胴部最大径部で稜をもち内彎して頸部へ径る壺である。釉の一部は外面底部にまでかかる。また内面は頸部付近までかかっている。高台畳付部には、粗い砂が付着する。色調は釉が黒色、胎土は緑灰色である。胴部最大径は 7.9 cm。8は口縁部の一部が残存する。短い「く」の字口縁である。口縁と頸部の境に沈線が1条はいる。内外面とも部分的に褐色の釉がかかる。胎土は灰黄褐色。復元口径は13.2cm。

水注（9～10）　9は頸部から肩部にかけて残存。外面に3条の沈線がめぐる。内面はタタキの後ヘラ削りとナデで調整している。釉は暗緑褐色で、外面にかかっている。内面は露胎で茶褐色。砂粒を含む。10は逆「L」字口縁で端部が下へ垂れ下る。口縁端部上面と口縁下位の部分以外は内外面とも赤茶褐色で砂粒を含む。復元口径29.4cm。

蓋（11）　円盤状の下位に回転糸切り底の底部がつく。つまみ部は欠損している。上面は淡灰白色の釉がかかり、下面はぜんぜん釉はかかっていない。胎土は赤褐色で若干の砂粒を含む。

甕（12～14）　12はやや張った頸部から内彎し、大きく外反し端部が若干直立する口縁をもつ。口縁部は厚く体部はうすい。胴部上位に断面三角形の凸帯が2本ある。口縁内外面はロクロによる横ナデ、体部外面は、タタキの後ナデ。内面は同心円文叩きのあとナデによって調整

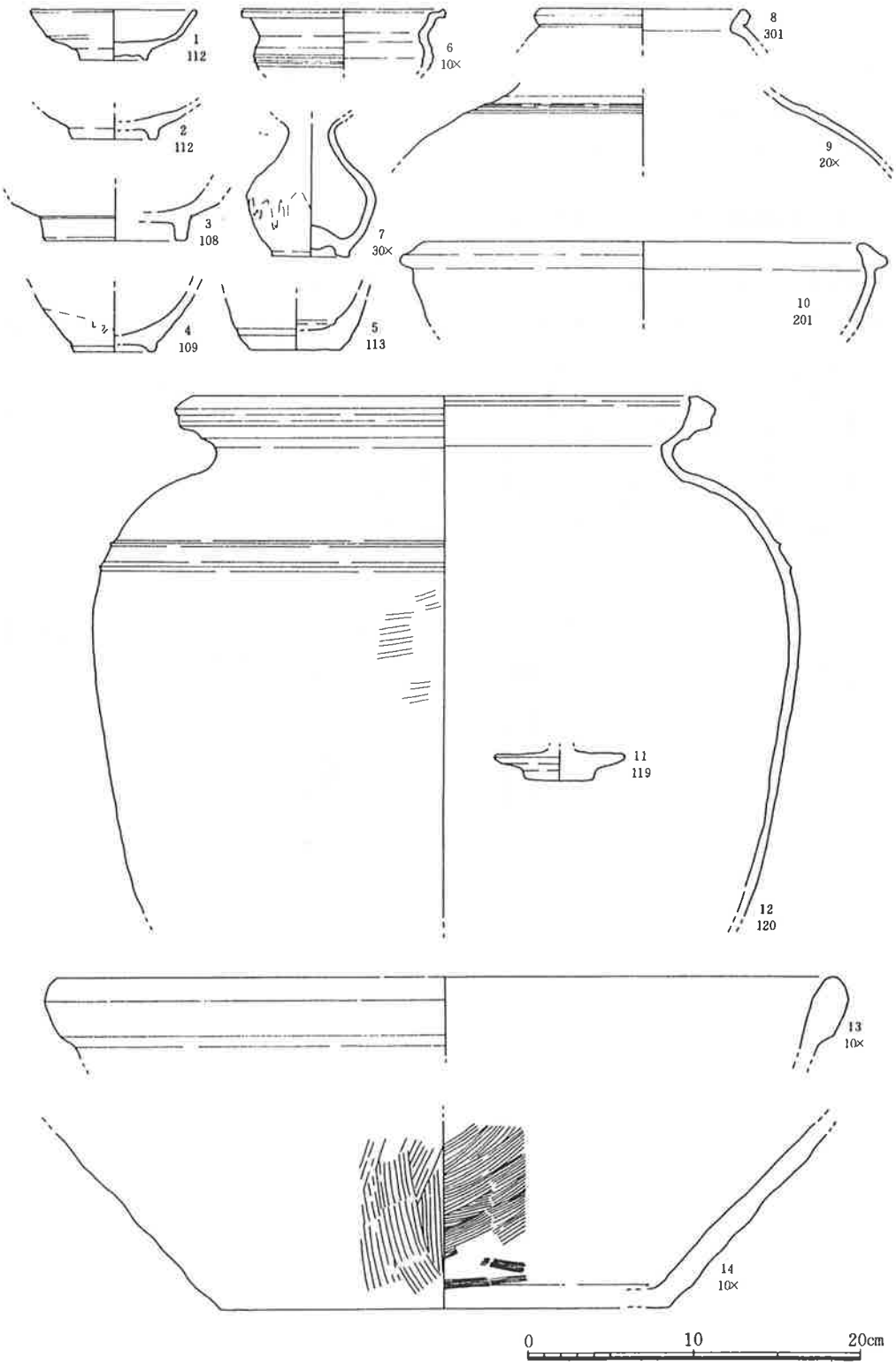


Fig.19　小路遺跡出土陶器実測図

している。全体的に緑の釉がかかっている。砂粒は含まない。口径32.8cm。13は口縁部がわずかに残存。全面にあずき色の釉がかかり、胎土は淡いあずき色で砂粒を含む。復元口径47.0cm。14は底部の一部が残存。体部は外上方へ直線的に立上る。内外面ともハケ目で調整。胎土は淡茶色で砂粒を含む。復元底径27.2cm。

6．石製品（Fig．20　PL．18）

石製品には石鍋、砥、子持勾玉がある。すべて滑石製である。

石鍋（4．5）　口縁部と底部の破片である。口縁部上面は平坦になっており、直下外面に

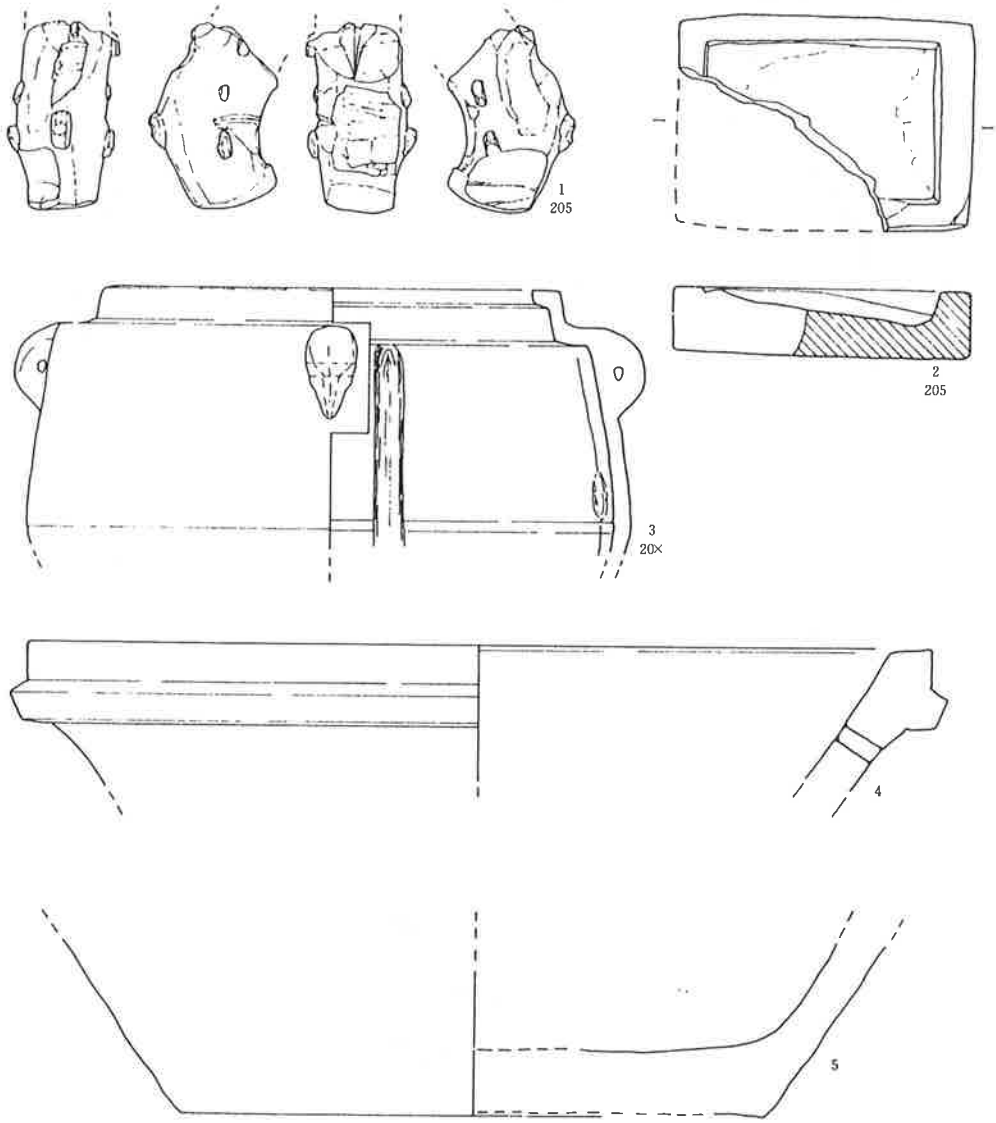


Fig.20　小路遺跡出土石製品・金属製品実測図

は断面コ字形の突帯がめぐる。突帯の下には器面と垂直に径5㎜の孔を穿つが、内部に鉄芯が残っている。外面にノミの痕が残るが、煤が付着する。口縁部上面および内面は磨いている。復元口径24.0cm。底部には内外面にノミの痕が残るが、外面には煤が付着する。底径15.3cm。

硯（2）　長さ7.9㎝、幅5.6㎝、高さ1.8㎝の丁寧なつくりの硯である。海は深さ0.9㎝で、壁はゆるやかに立ち上る。ゆるやかな傾斜をもつ陸部端には深さ0.15㎝の溝状のくぼみがある。

子持勾玉（1）　上部を欠く。背部に2個、側面にはそれぞれ2個と3個の子持勾玉形が残るが、腹部など後に削った部分が多く、全体を復元し得ないが、背部と両側面には3個ずつの子持勾玉形がつくものと思われる。現在長4.9㎝。

7．金属製品（Fig．20・21　PL．18）

金属製品には鉄釜と銅銭がある。

鉄釜（3）　口縁部から体部にかけての破片である。直線的な体部はやや内傾し、上端で内へ屈曲し肩を張り、上方へ屈曲する口縁部の先端はL字状に内側へ屈曲する。体部上端に鈕がつくが、対峙して2個つくものであろう。内面にはタテ方向に隆起した部分とヒビがあるが、後者には補修のあとがうかがえる。口外径122㎝。

銅銭　32枚出土したが、錆化がひどく、種類を判読できないものが多い。遺構に伴なったものは少ないが、SD302溝からは21枚出土し、判読できるものとして洪武通寶がある。他にはSB310建物柱穴から出土した布銭は珍しい。またSK207土壙出土品として熙寧元寶、Ⅰ区下層表採品として祥符元寶などがある。

Fig.21　小路遺跡出土銅銭拓影（原寸）

8．土製品

土製品としては土錘と瓦がある。

土錘（Fig．22）　明確な遺構に伴なったものはほとんどない。形態的には管玉状の円筒形のものと、中央部が肥厚し菱形に近くなるものの2種である。法量的には大きく4群に分かれ

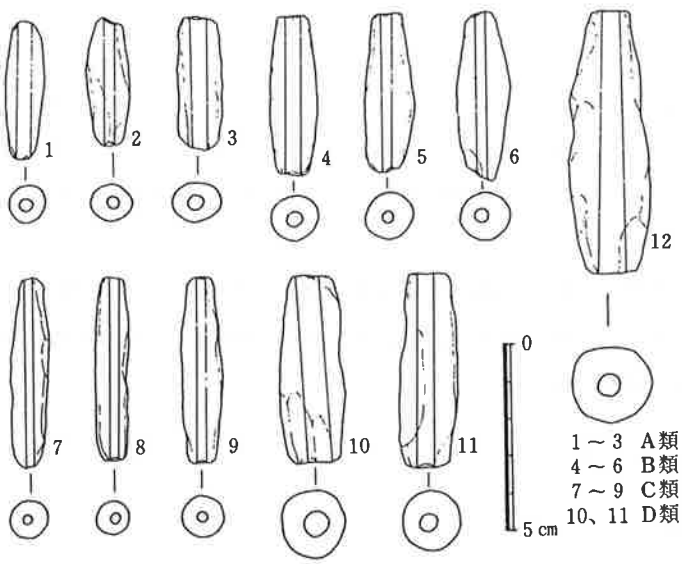


Fig.22　小路遺跡出土土錘実測図

る。A群は長さ3.4～3.8cm、径0.9～1.2cm、B群は長さ4.3～4.7cm、径1.2～1.4cm、C群は長さ4.7～5.4cm、径0.9～1.4cm、D群は長さ5.0～5.2cm、径1.6～1.8cmであり、ただ1個長さ7.08cm、径2.04cmの大型品がある。すべて胎土中には砂粒をあまり含まず、淡黄褐色～赤褐色のものが多い。

瓦（Fig. 16　PL. 18）　丸瓦である。全長22.2cm、幅12.4cm。表面はナデ調整、裏面には粗い布目圧痕がつく。周辺部は大きくヘラケズリしている。胎土中にはほとんど砂粒を含まず、表面は黒灰色となっている。玉縁の部分に「大」の字を陰刻する。

9．獣骨（PL. 18）

SK 205 土壙埋土中から3点の獣骨が出土した。九州大学農学部畜産学第二教室の高原斉による鑑定結果は次のとおりである。

種類　鹿（推定年令1～2才、体重約40kg）

部位　①右上腕骨Humerus（上腕骨頭軟骨結合部離断）

②右橈骨Radius　（遠位端消失）

③右下顎骨体Mandibula

他にII区表土中から海棲の哺乳類（イルカなど）と考えられるものの指骨が1点出土している。

V．総　　括

Ⅰ区上層では明確な遺構を検出できなかったが、Ⅰ区下層とⅡ区では掘立柱建物を主体とする遺構を多数検出した。各遺構はその出土遺物から、Ⅰ期とⅡ期に大きく分けることができる。

Ⅱ区ではⅠ期の小規模な建物3棟（ＳＢ211・212・213）と溝3条（ＳＤ201西・202・203）、柵1列（ＳＡ215）、土壙1基（ＳＫ207）などが、ある程度の配置関係をもって存在する。中央部東寄りに位置する南北へのびるＳＤ201西溝を境にして、建物群はすべて西群に存在する。Ⅱ期になると、ＳＤ201西溝の東側に接してＳＤ201東溝が営まれ、西部中央やや南寄りに比較的大規模なＳＤ214建物が存在する。またＳＤ201東溝を切って、池状の大規模な土壙が構築されている。Ⅰ期、Ⅱ期を通じて、建物と溝、土壙などの配置関係にほとんど変化はみられない。

Ⅰ区下層ではⅠ期の遺構は少なく、ＳＢ307・ＳＢ208建物とＳＤ301溝が検出されたに過ぎない。これら2棟の建物の棟方向は一定しており、溝方向はそれらに直行する方向をとり、ある程度の配置関係がうかがえる。Ⅱ期になると、遺構の数は増加し、ＳＢ310建物のような大規模な建物が出現する。Ⅰ期に属する2棟の建物を除く6棟の建物はすべてⅡ期に属するが、それらの棟方向は全く一致している。Ⅱ期に属する遺構がすべて同時に存在したとは考えられないが、配置関係がうかがえて興味深い。ＳＢ310建物を中心とする地区が、Ⅱ期における小跡遺跡の中心部であった可能性がつよい。

Ⅱ区・Ⅰ区下層ともに調査面積が狭く、遺跡の全域を復元し得ないが、おそらく建物群はⅠ区全域からⅡ区西半部にわたって営まれており、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて館の主体となる建物はⅠ区下層調査区付近に存在していたと考えられる。

遺物としては土師器、陶磁器、その他の土器、石製品、土製品、金属製品などを出土したが、それぞれに興味をひくものが多い。

まず土師器と陶磁器についてみてみると、年代をほぼ推定できる遺物としてＳＤ201西溝、ＳＤ301溝、ＳＤ201東溝、ＳＫ205土壙出土などの一括遺物がある。その内訳は次のとおりである。

ＳＤ201西溝……**土師器**　小皿Ａａ・Ａｂ、坏ＡⅠ・ＡⅡ
　　青　磁　碗ＡⅠａ・ＡⅠｂ・ＡⅡａ・Ｂｂ・Ｇ
　　白　磁　皿Ｆ、碗Ｂ
ＳＤ301溝……**土師器**　小皿Ａａ、坏ＡⅠ
　　青　磁　碗Ｂｂ・Ｇ
ＳＤ201東溝……**土師器**　小皿ＢⅠ・ＢⅡ、坏ＣⅡｂ・ＤⅠ・ＤⅡ

白　磁　皿C・E

ＳＫ205土壙……土師器　小皿ＢⅠ・D、坏ＣⅡａ・ＣⅢ・ＤⅡ

染　付　皿D、碗Ｂｂ

以上でわかるようにＳＤ301溝出土の土師器、陶磁器はすべてＳＤ201西溝においても出土しており、両者は全く同時期のものである。土師器小皿と坏についてみると、第Ⅳ層から「貞応三年（1224）」の木札を出土した大宰府史跡ＳＤ605溝[1]出土のそれに類似し、小路遺跡で土師器に共伴した磁器類の組み合せからみても、13世紀前半から中頃（小路遺跡Ⅰ期）に比定できよう。

次にＳＤ201東溝とＳＫ205土壙出土の遺物であるが、遺構の切り合い関係から、ＳＫ205土壙出土のものが新しくなる。土師器についてみると、坏ＤⅡは共伴するものの、小皿は直線的な体部をもつ小皿ＢⅠから小皿Ｄへと数量的に増加する傾向をもつ。磁器についてみても、ＳＤ201東溝からは白磁を出土するのに対し、ＳＫ205土壙では染付（青花）の皿と碗が出現してくる。遺物の年代としては16世紀（小路遺跡Ⅱ期）に比定できよう。

また明確な遺構に伴うものではないが、国産の染付、陶器も出土している。他に注意をひく陶磁器として、ＳＤ302溝、ＳＫ104土壙から出土した白磁皿Ａと、表採品ではあるが青磁碗Ｈ・梅瓶などがあげられる。後者は白土象嵌による文様がつく高麗青磁であり、最近国内でも出土例が増してきたものである。前者の小皿は太宰府[2]や熊本県塚原[3]、同浜の館[4]などで出土しているが、産地は今のところ不明であると言って良い[5]。

土器、陶磁器以外の興味ある遺物としてはＳＢ310建物北側通の西から3番目の柱穴から出土した銅銭とＳＫ205土壙から出土した子持勾玉などがある。前者は唐の「布銭」で、あまり出土例を聞かないものであるが、おそらく宋銭や明銭に混入して輸入されたものと考えられる。後者の滑石製子持勾玉は県内では三日月町石木遺跡[6]に次いで2例目であるが、小型で簡素化されたつくりのものである。おそらく他の地域で採集されて、小路の館へもたらされただろう。

以上のように小路遺跡は大きく13世紀と16世紀の2時期に営まれた集落（館）であり、その間を埋める遺物はほとんど存在しないことなどから、鎌倉時代に一度廃絶した集落に、改めて戦国時代に館が営まれたものとみられる。戦国時代においては、ＳＢ310建物の壮大さや、貴重な輸入陶磁器にみる生活水準の高さ、また昭和49年に出土した石塔類などからみても、伝承としての戦国武将徳島氏の館跡と考えて差しつかえない。ＳＤ302溝から出土した白磁皿の底に記されている花押も、このことを肯定する手がかりとなろう。鎌倉時代についても豊富な輸入陶磁器からみるように、一般の集落とは考え難く、やはり在地の武士団の館かと思われる。

註

(1) 「太宰府史跡」昭和49年度発掘調査概報　九州歴史資料館1975

(2) 「大宰府史跡」昭和53年度発掘調査概報　九州歴史資料館1979

(3) 「中国陶磁の美」熊本県立美術館　1980

(4) 熊本県教育委員会「浜の館」熊本県文化財調査報告　第21集　1977

(5) 西田宏子によると李朝の白磁かも知れないということである。
小路遺跡出土陶磁器については西田宏子から多くの教示を得た。

(6) 佐賀県教育委員会「石木遺跡」佐賀県文化財調査報告第35集　1976

(付　編)

小路遺跡出土の石塔婆群

木　下　之　治

1．発見の経過

芦刈町内の水田地帯の地質調査を数か所で実施した際、1か所から石塔婆群が出土した。昭和49年4月20日に芦刈町教育委員会から県文化課へ電話連絡があったので、同日現地を訪れ、遺構と遺物の確認を行なった。

2．遺跡の概要

沖積平野の水田中にあるが、芦刈町では最も北端に近く牛津町に近い地点に位置している。表土下70cm余りのところに、石塔婆が遺棄された状態で無秩序に埋没しているのをうかがうことができる。この石塔婆群が埋没している範囲は明らかでない。

地層の中間層に薄い灰層が混入しており、また、土師系と瓦器系の土器片が混入している。瓦器系の土器片の中には、底部に煤が付着している土器釜があるのも注目される。

この地は以前は周囲より幾分高く微高地状の地形を呈していたといわれる。この遺跡の北方やや東寄りに天満宮が奉祠され、南方至近の微高地は、戦国時代における当地方の武将徳島氏の館跡であると伝えられている。

3．石塔婆の概要 (Fig．23　PL．19)

現在掘り出されている数は余り多くなく、しかも塔の軸部または基礎などの部分は埋没されたままであるので、その全貌を知ることは困難である。しかし、現時点における観察の結果は、五輪塔と宝篋印塔の2種類に限定されているように推定される。

五輪塔の火輪には、隅飾りの耳が既に発生しているが、まだ発生期の様式をとどめている。小形の一石五輪塔も出土しているが、県内では三田川町田手の東妙寺や三根町西島光浄寺などにその例が知られているにすぎず、遺例の少ない石塔婆の1つとして注目される。

宝篋印塔は、屋根の部分の段型が消滅しているのもある点がまず注目される。相輪の部分は、すでに九輪が簡略化されていて時代が下降することを示しているが、各種の形式のものが出土していて変化に富んでいる。即ち、断面が円形を呈するもの、方形のもの、隅丸方形のもの、更には九輪の部分は方形であるが宝珠は円形を保っているもの、正面の部分のみ彫刻を施して側面は簡略化し、背面は素地のままで正面観のみを整えたもの、など多くの形式のものがあって、石塔婆の形式変化を研究する上から興味ある資料である。

宝篋印塔の中にも一石造りのものがあって注目される。一石宝篋印塔は、肥前町にあったものが現在県立博物館に展示されている1例以外は未見であった類例の少ない石塔婆の一つであ

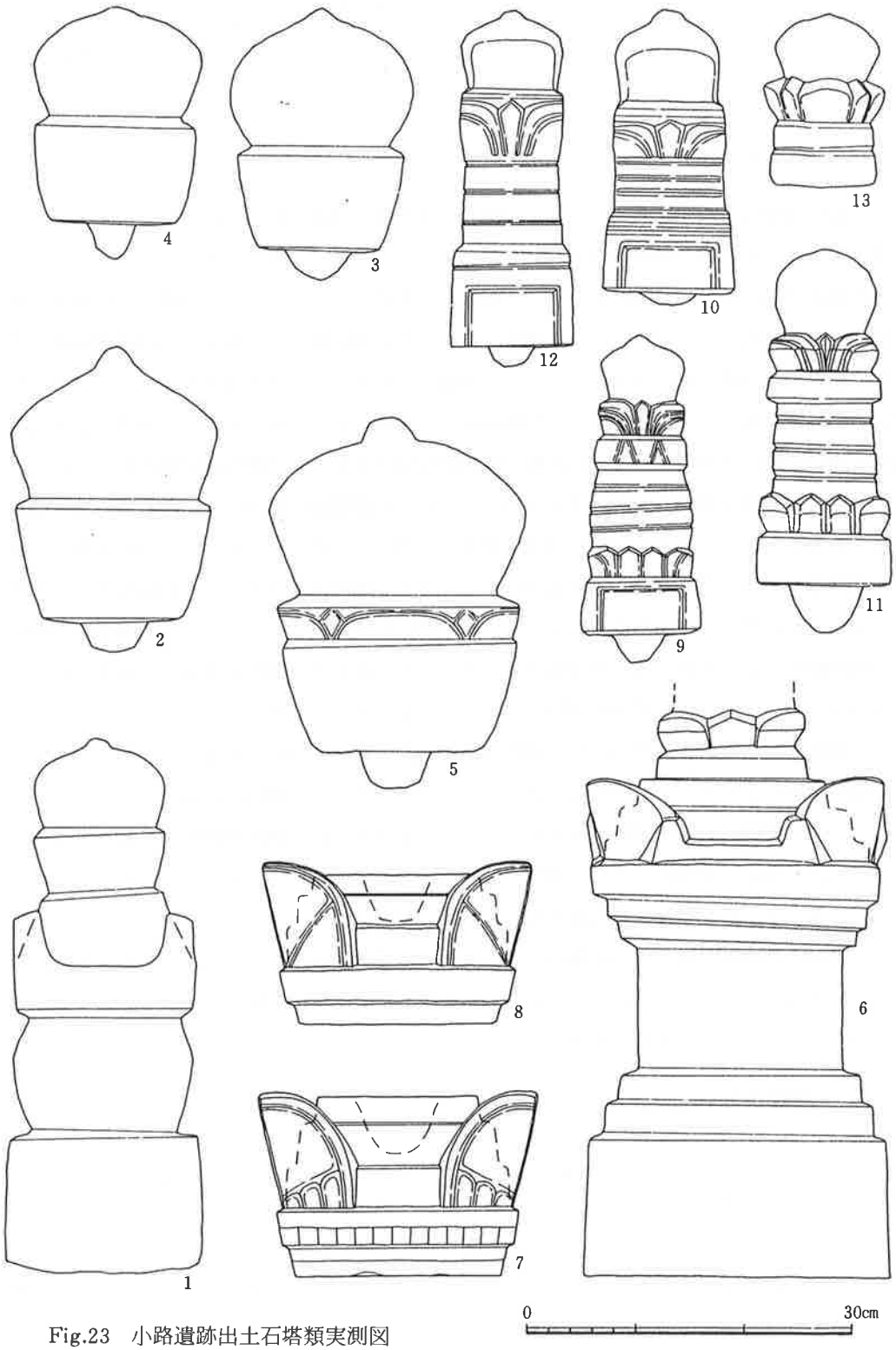


Fig.23　小路遺跡出土石塔類実測図

る。県立博物館にあるものは、すべての部分が極度に簡略化されているが、この遺跡にある一石宝篋印塔は、基礎や屋根に二段ずつの段型が設けられている本格的なもので、全く類例のない構造として注目される。

4．考察と課題

この石塔婆群は、その形式からみて室町時代末期の天正年間（1573～1592年）前後のものと推定される。この時期の石塔婆は小型化し、幾型化する傾向が認められる。

この室町末期から江戸初期にかけての五輪塔、宝篋印塔、宝塔などの石塔婆は、県内の各地に群在した様相を呈して残存している例が多い。この時期に限って、数多くの石塔婆が造立された社会的背景を明らかにすることが一つの課題ではなかろうかと考えられる。真言、天台などの、密教系寺院とこの石塔婆群とは関係があるのではなかろうかとも考えられるが、室町末期から江戸初期にかけての一時期に多数の石塔婆が造立された社会的要因は明らかでない。

かつて、筑後川支流から砂利と共に引き上げられた石塔婆群と頭骨とを三根町の寺院で調査したことがあったが、頭骨の一つに刀痕が鮮やかに残っていたのを忘れることができない。戦国の武将達が民寺を有していたことは知られているが、戦没者等に対しての回向などについては、記録や戦記物等には余り記されていないので明らかでない。しかし、この石塔婆群の中には、戦国時代における武将達、特に戦没者に対する追善供養等と関係のあるものが多いのではなかろうかということが、造塔の盛期との一致の上からも考えられる。

この遺跡の石塔婆群は、戦国時代の武将徳島氏の館付近に位置している点からも、石塔婆造立の要因を明らかにすることが可能ではなかろうかということが期待される。

また、この時期の石塔婆は類型化されていて、大量生産された規格品的性格を有するものが多い。この多数の石塔婆は、どこで製作されたものであるのか、現在明らかでないが、これを明らかにする手がかりとなる遺物は残存していないだろうか。

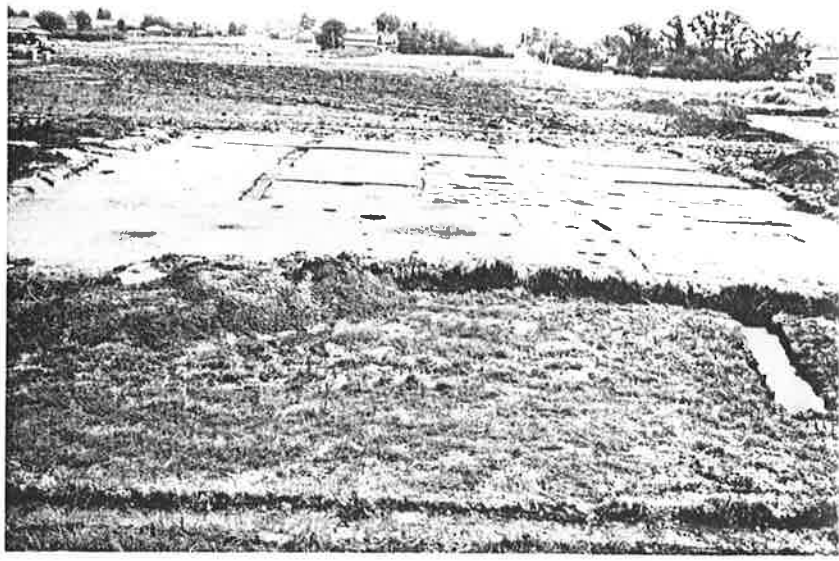
この遺跡の石塔婆群は、地中に埋没しているので墨書銘が残存しているものの出土も期待され、また各種の形式のものがあって一時期の石塔婆の形式集成にも極めて重要な価値を有しているのではなかろうかと考えられる。

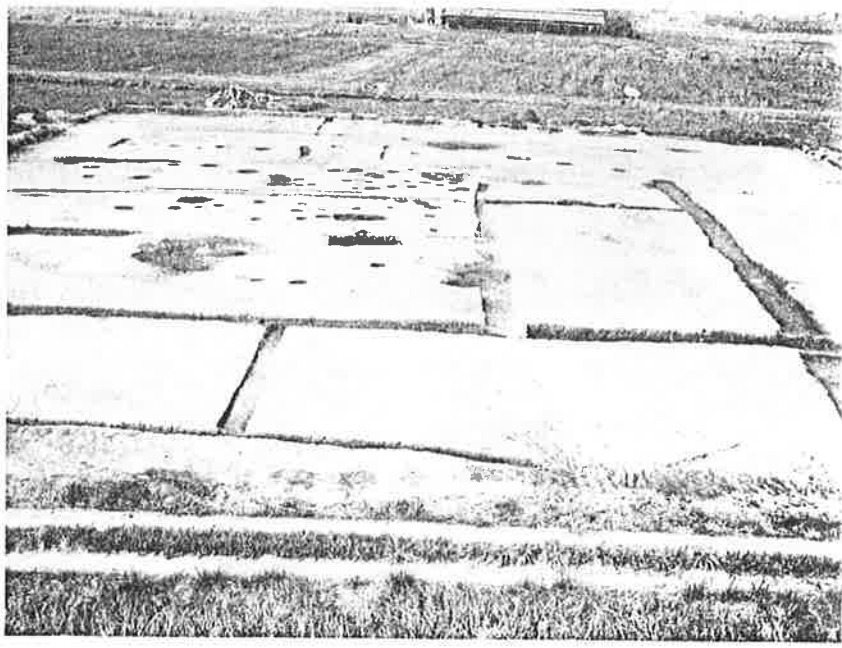
5．遺跡の保存について

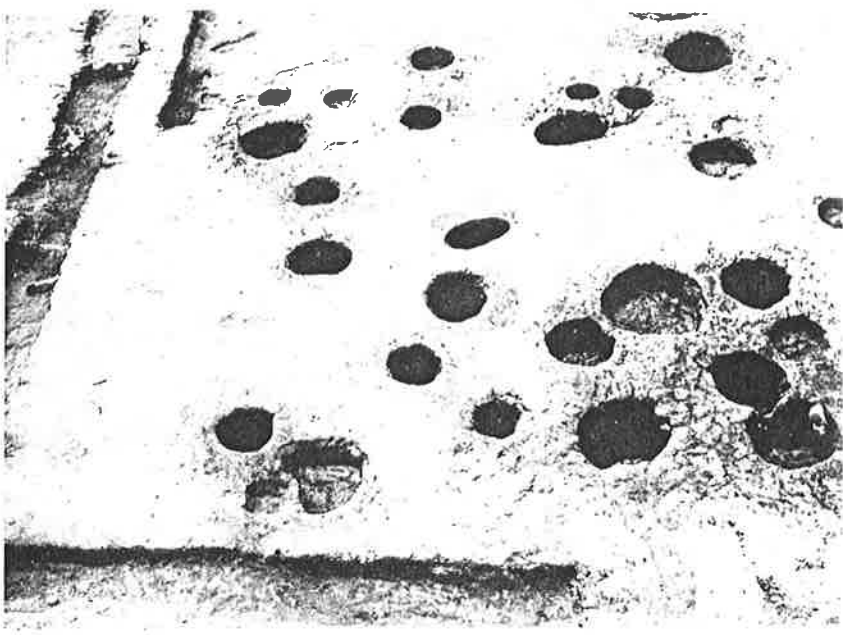
水田であるため、埋戻して保存するのが最もよい処置ではないかと考えられる。しかし、現在掘り出した石塔婆は、教育委員会で研究資料として適切に保管しておいていただくことが最も好ましいことではなかろうか。

後日、この遺跡付近が圃場整備事業または道路、住宅地等の対象となった際に、改めて発掘調査を実施して、遺構と遺物について検討すべきではなかろうかと考えられる。

図　版

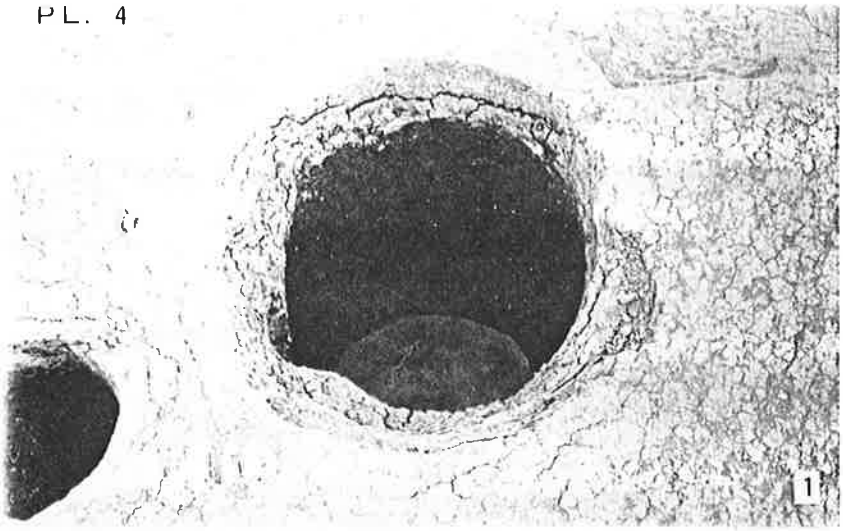




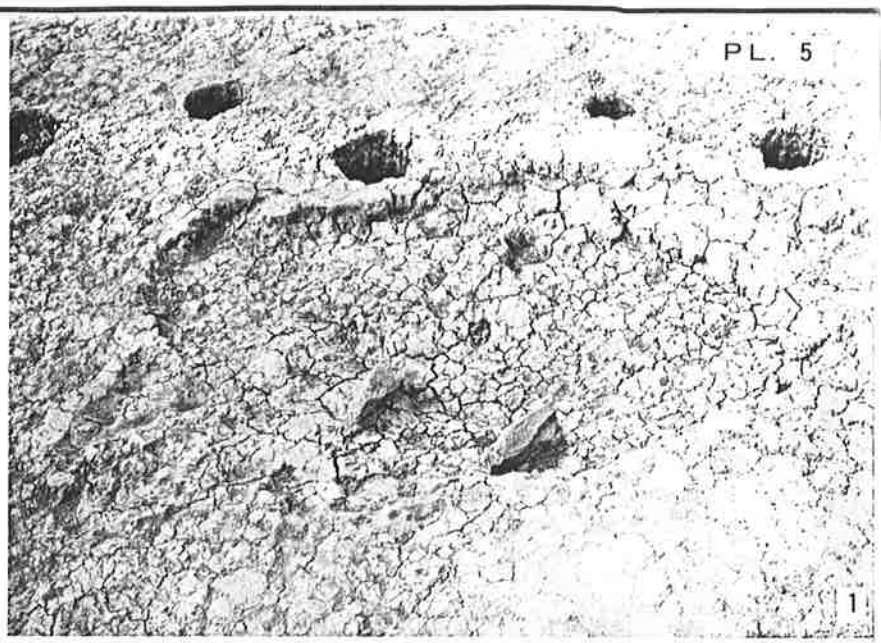


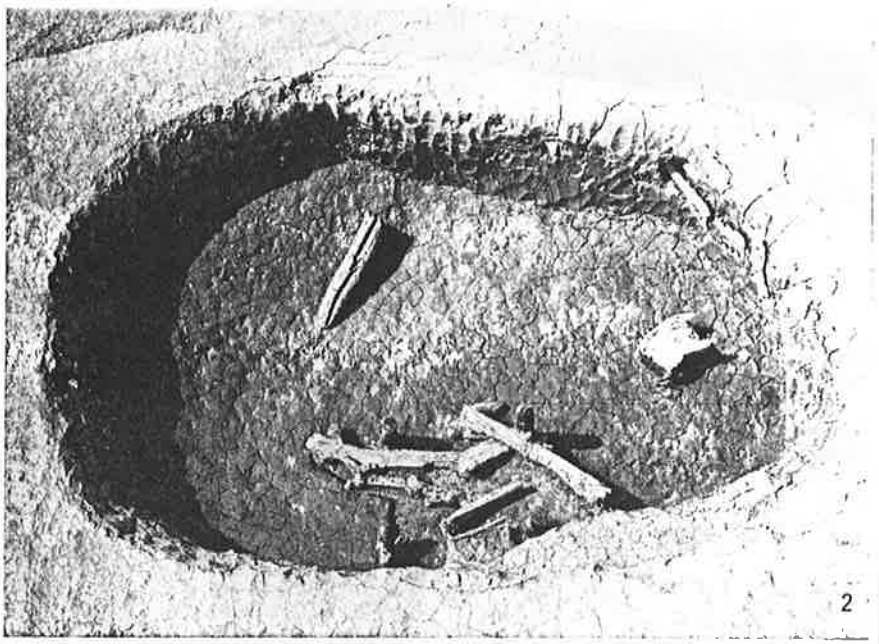
1．A区全景〈西から〉
2．　同　〈東から〉
3．A区小穴群

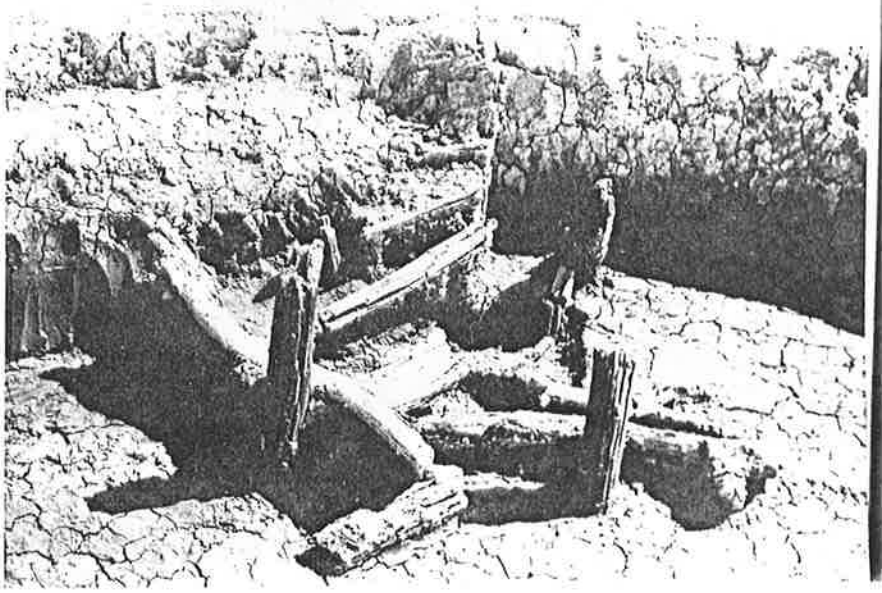
PL. 4



1．ＳＥ204井戸
2．ＳＤ201溝東溝
3．ＳＤ202溝〈東から〉

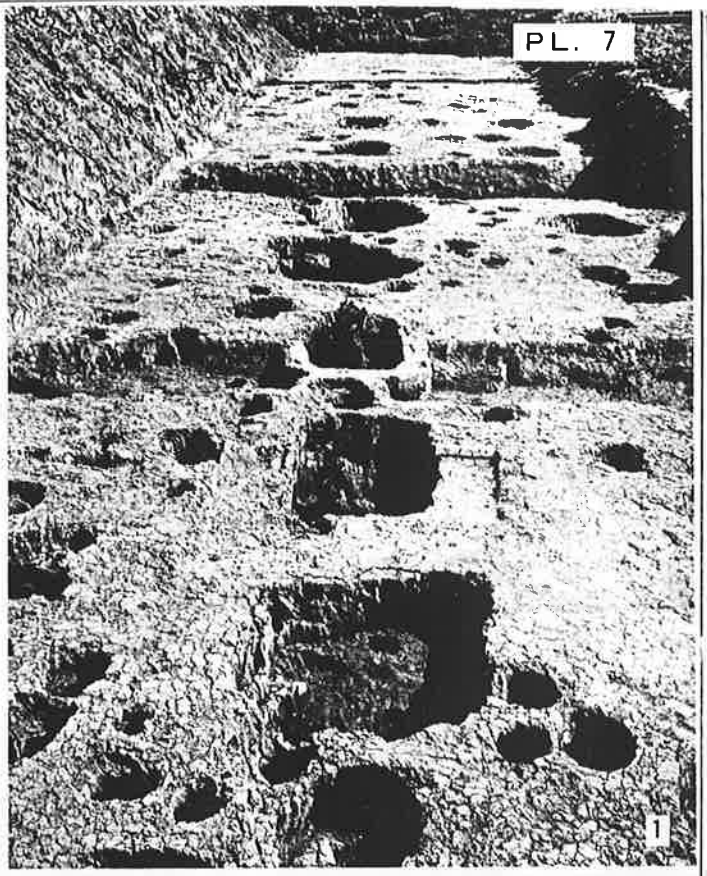


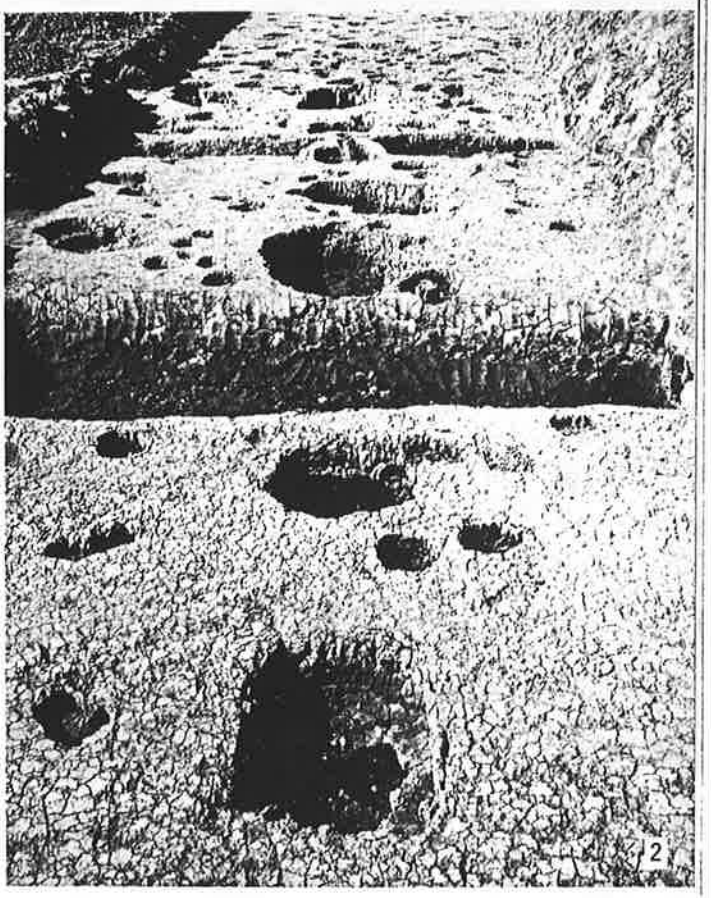




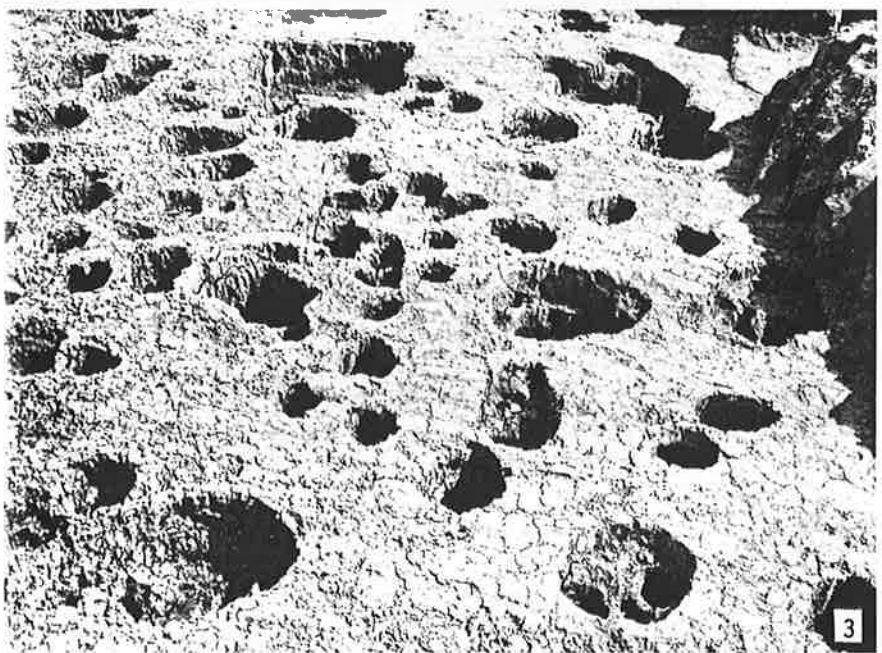
1．ＳＫ206土壙
2．ＳＫ205土壙
3．同部分

1．Ⅰ区下層全景〈東から〉
2．　〃　〈西から〉

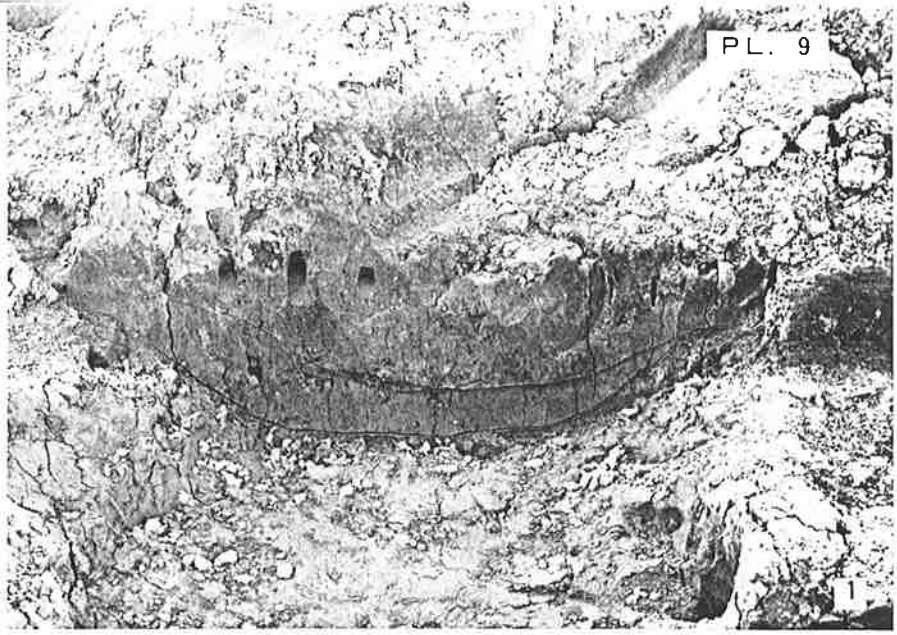


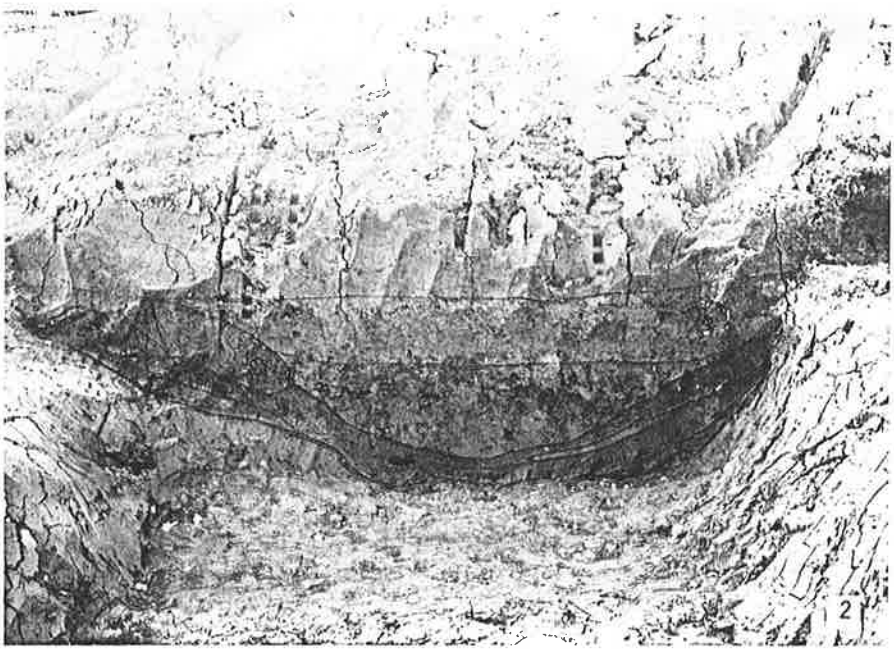


1．ＳＢ310建物北側柱穴〈西から〉
2．　　同　　〈東から〉

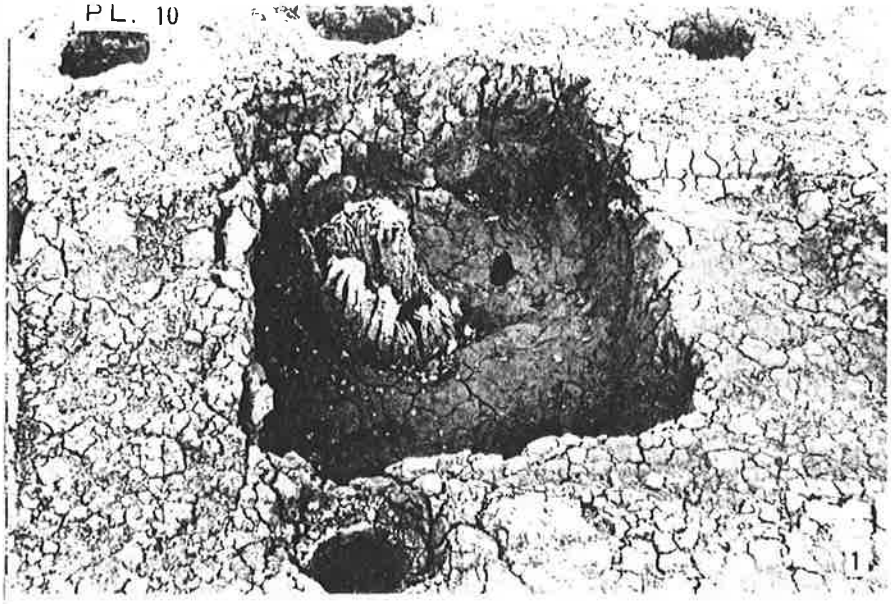


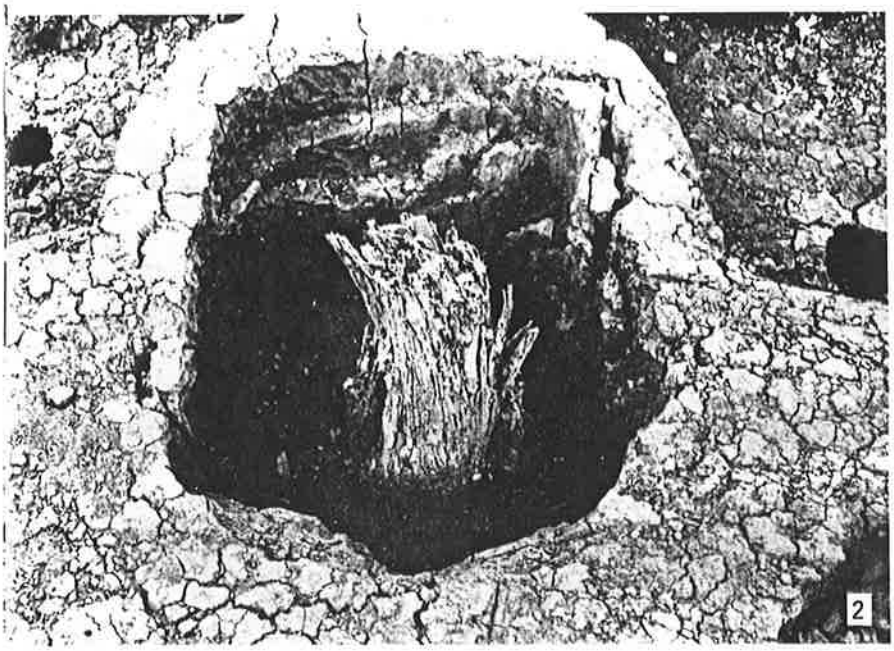
1．ＳＢ310建物西側柱穴〈北から
2．　同　　東側柱穴〈北から
3．ＳＢ309建物〈西から〉

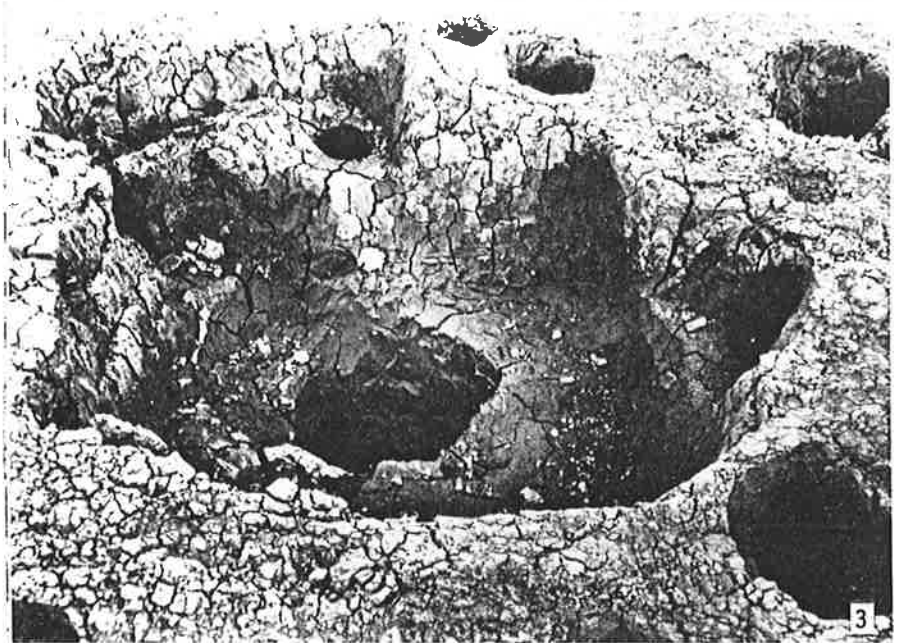




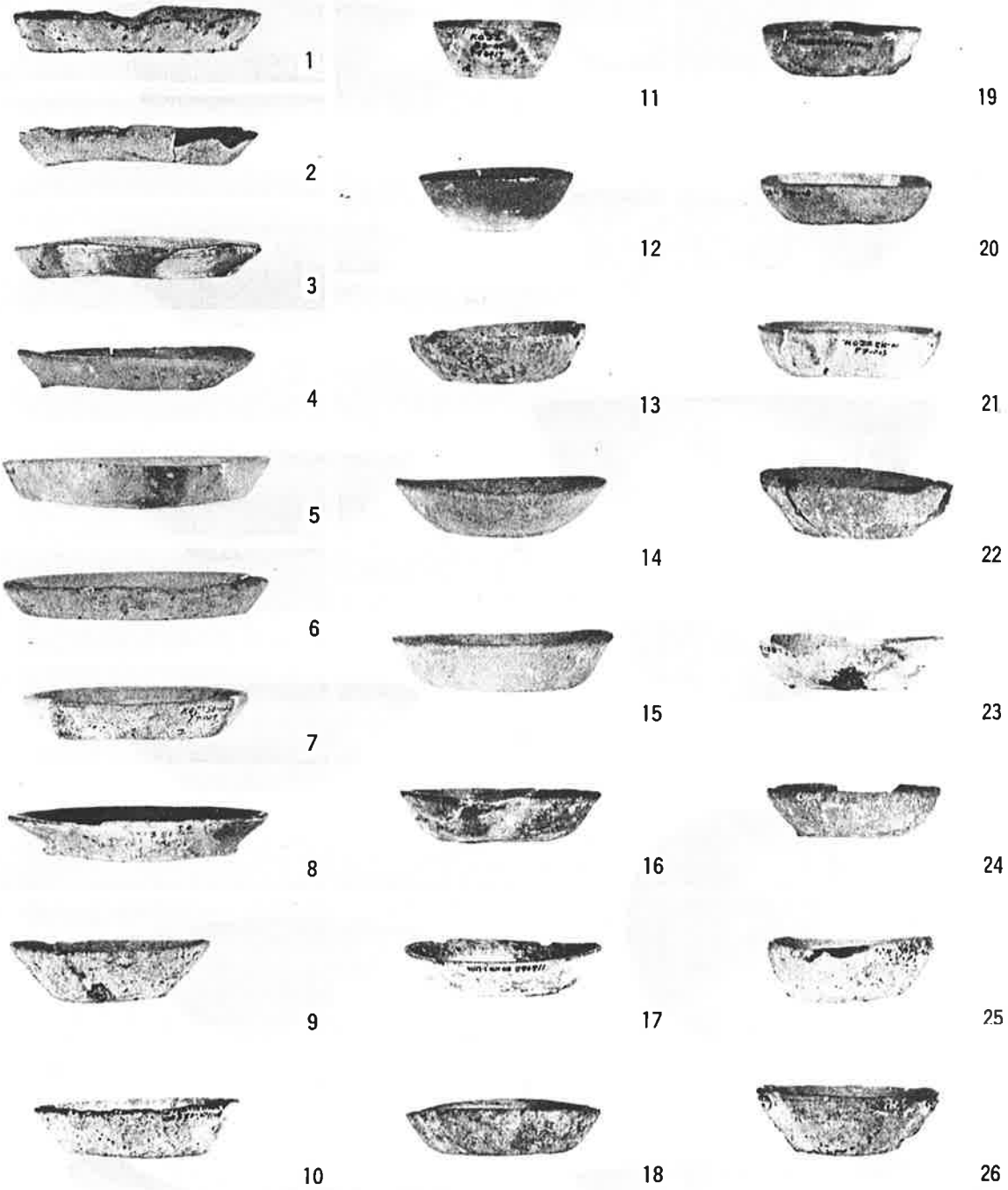
1．ＳＤ301溝断面〈北から〉
2．ＳＤ302溝　〃　〈　〃　〉
3．ＳＤ303溝　〃　〈　〃　〉



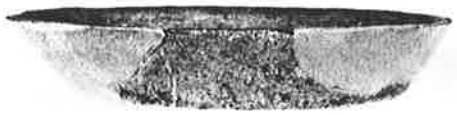




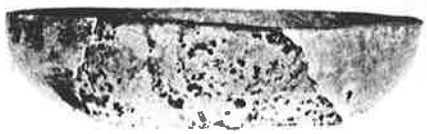
1．ＳＢ310建物柱穴
2．　　同
3．　　同



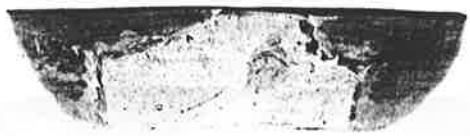
1．　II区出土
2～8．SD201西溝出土
9．　SK205土壙出土
10．　SD201溝出土
11．　SD104溝出土
12．　SD108溝出土
13～18．SK117土壙出土
19～22．SK205土壙出土
23．　SD302溝出土
24．　SD113溝出土
25．　SD109溝出土
26．　I区下層出土



1



2



3

4

5

6

7

8

9

10

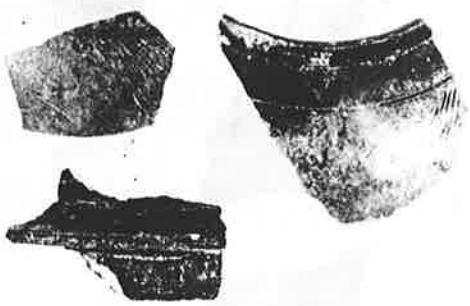
11

12

1．　SD301溝出土
2．　SD201西溝出土
3．　SD301溝出土
4．　SK205土壙出土
5．　6の見込み
6．　SK205土壙出土
7．　SK118土壙出土
8～11．SK117土壙出土
12．　SD201西溝出土

1

2



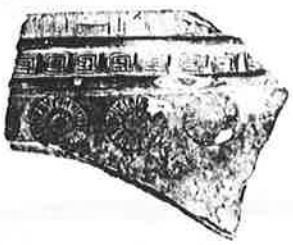
3

4

5

6

7

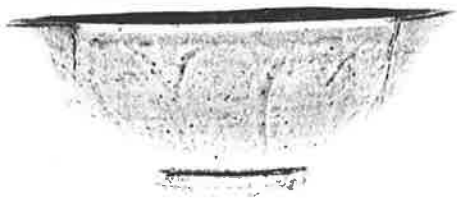


8

9

1．　(左) S D301溝出土 (右) II区出土
2．　(左) S D109溝出土 (右) I 区下層出土
3．　(右) S K205土壙出土 (左上) S D108溝出土
　　(左下) S D302溝出土
4．　S D201溝出土
5．　S K113土壙出土
6．　S D201溝出土
7．　S K205土壙出土
8．9．S D201溝出土

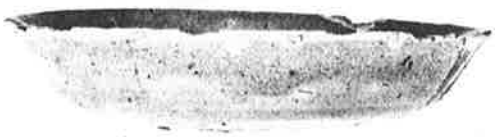
1



2

3

4

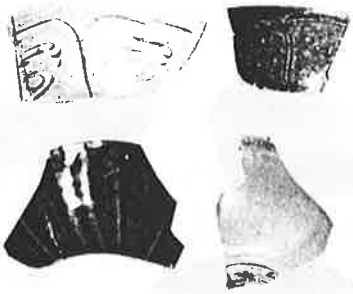


5

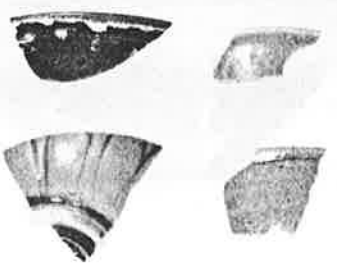
6

7

8

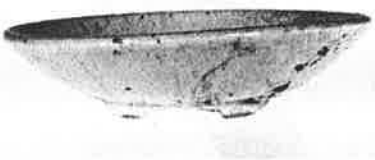


9



10

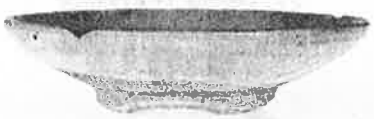
1．　SD201西溝出土
2．　SD301溝出土
3～6．II区出土
7．8．I区下層出土
9．10．小路遺跡出土青磁



1

2

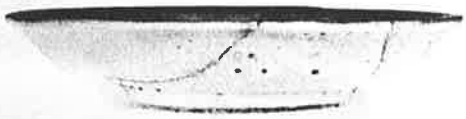
3



4

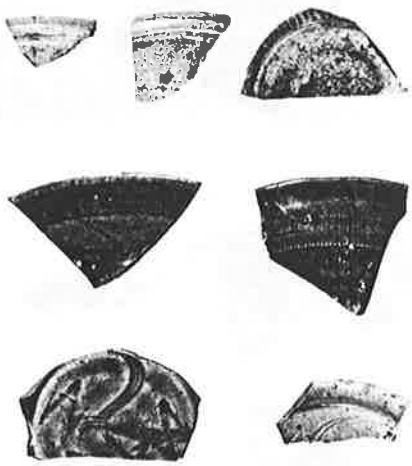
5

6



7

8



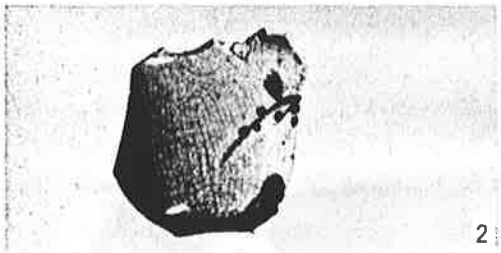
9

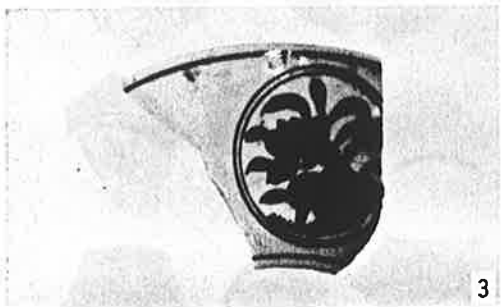
1．ＳＫ118土壙出土
2．　同　見込み
3．　同　底部
4．ＳＫ118土壙出土
5．　同　底部

6．ＳＤ201西溝出土
7．ＳＥ204井戸出土
8．小路遺跡出土白磁
9．　同　白磁・青磁
（上３点が白磁）

PL. 16

1

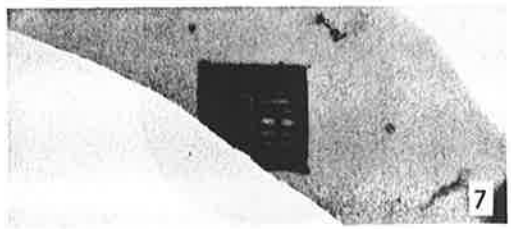

2


3

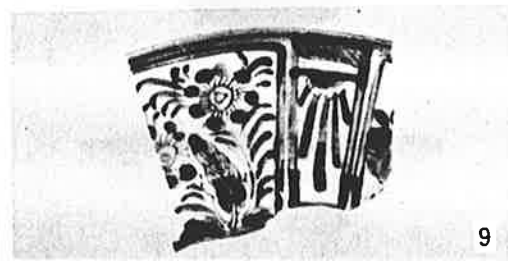
4

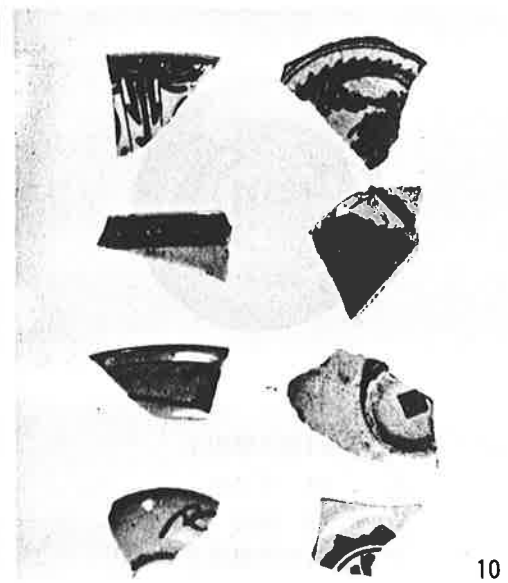
5

6


7

8

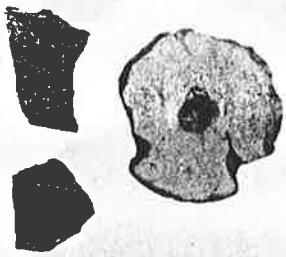

9


10

1．ＳＤ101溝出土
2．ＳＤ106溝出土
3．II区出土
4．Ⅰ区上層出土
5．小路遺跡出土
染付(左下は
6．ＳＫ205土壙
7．　同　　銘
8．II区出土
9．　同
10．小路遺跡出土
(国産品)

1

2



3

4

5

6

7

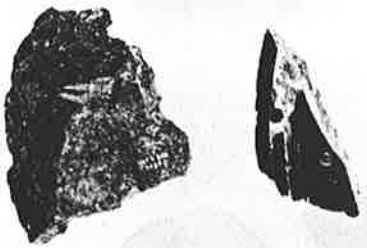
8

1．ＳＤ112溝出土
2．Ⅰ区下層出土
3．ＳＫ121土壙出土
4．小路遺跡出土陶器
5．ＳＤ302溝出土
6．ＳＤ201西溝出土
7．ＳＫ205土壙出土
8．Ⅱ区出土

1

5

2

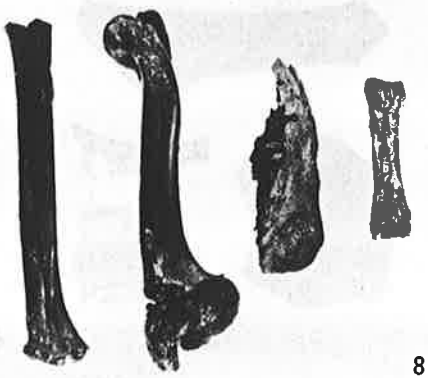


6

3

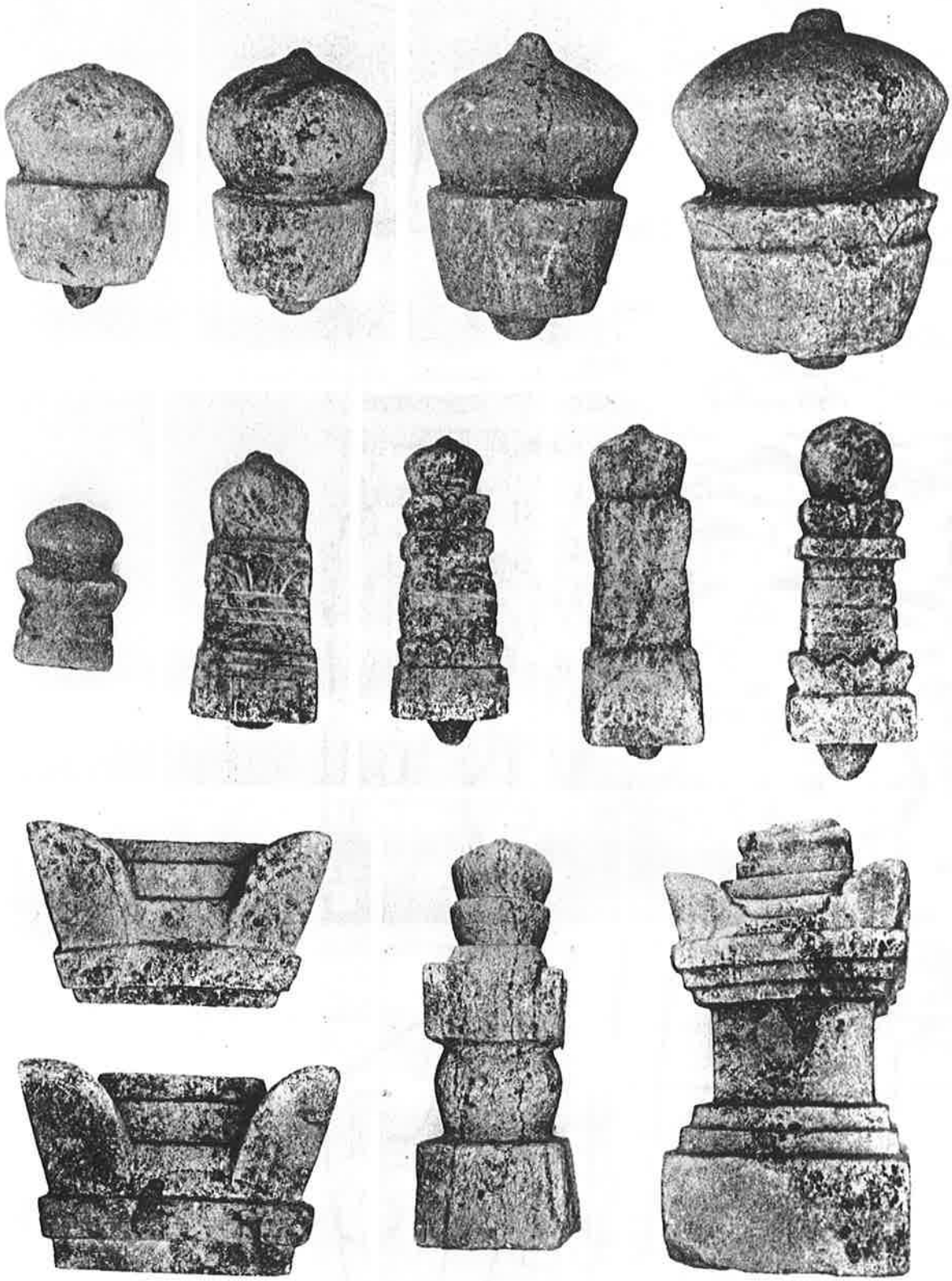
7

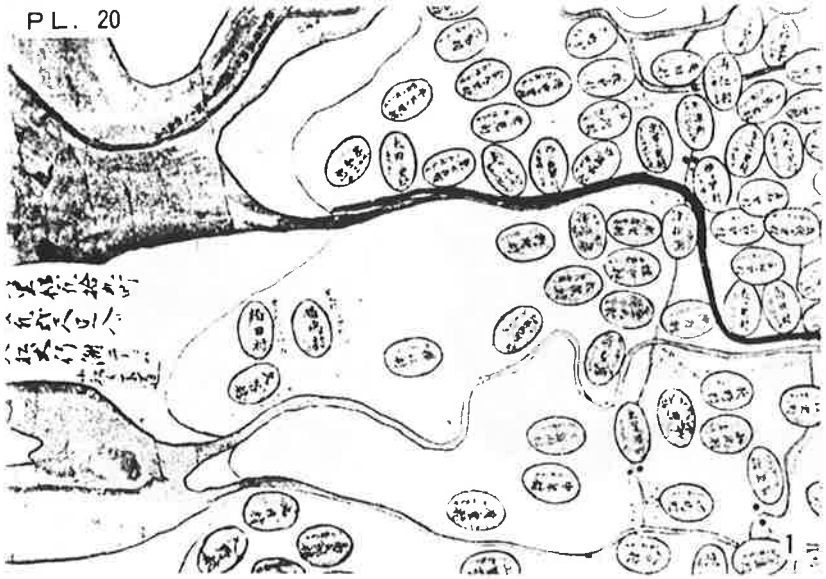
4

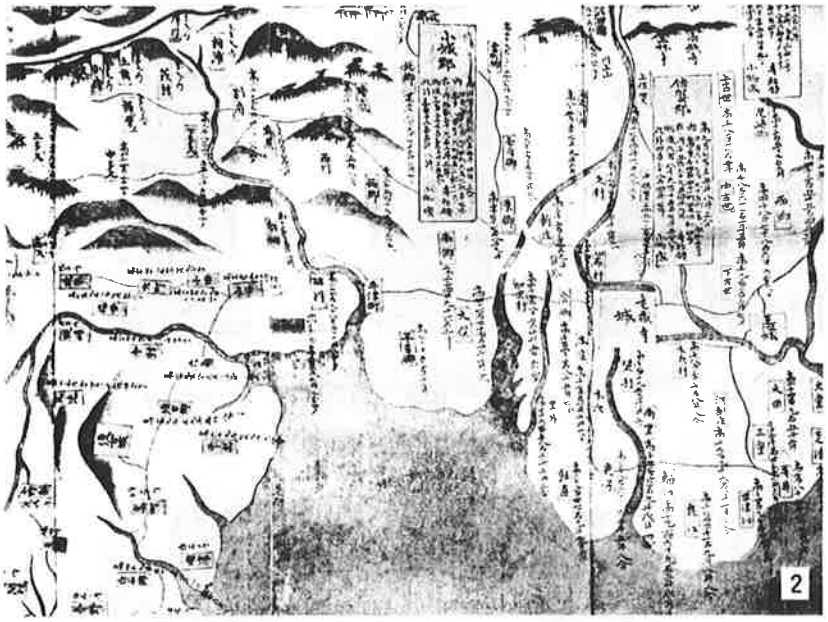


8

1．5．ＳＫ205土壙出土
2．　　同　　出土
3．　小路遺跡出土銅銭
4．　II区出土
6．　小路遺跡出土石鍋
7．　Ｉ区上層出土
8．　ＳＫ205土壙出土







1．慶長肥前国絵図（部分）
2．元禄肥前国絵図（〃）
3．文化八年平吉郷絵図（〃）

小　路　遺　跡

昭和55年３月20日印刷
昭和55年３月31日発行

発　行　芦刈町教育委員会
小城郡芦刈町三王崎

印　刷　合資会社　音成印刷所
小城郡小城町中央通り